

四 共同討議 「文化の型」

西山　ともかく「型」というのはそれぞれ、誰でもお考えがあると思います。それ程にいろいろさまざまあると思います。それで、長崎旅行というものを致しまして、何かそこで一つの共通の話題になるようなものはないかというようなことで歩き回っております内に、あ、これはなるんじゃないかな、ということが、天草四郎のところまで、話がありました。

少年スーパーマン

そこで、その少年のお話になる前に、私が考えました、日本の少年のスーパーマンというようなことで、少し前置きをお話させて頂きます。例えば、ヤマトタケルノミコト、これは、『日本書紀』と『古事記』と大変違っております、記述が。『日本書紀』の方は、天皇の皇子として堂々たる極めて立派な存在として描かれています。けれども、

『古事記』のヤマトタケルというのは大変なやんちゃ者で、御兄さんの足を引き裂いてしまった、なんていうんで、それで父の天皇に叱られて、熊襲征伐に行けといわれるわけです。そういう少年の乱暴者で極めて力の強い、スーパーマンであるわけです。それが美しい少女に化けまして、そして公衆の面前で酒盛りの真盛中に、クマソタケルを突き刺すんです。『日本書紀』は酔い潰れた時に刺すんですが、非常に違っております、石母田さんなんか「日本の英雄時代論」のところでは、『古事記』のヤマトタケルノミコトを引き合いに出してくるわけです。『古事記』に描かれたヤマトタケルノミコトが少年として非常にすごい力のあった人として描かれ、しかもそれは大変人気を集めていると、いうことでございます。それから、また細かく見ればいくつもあるんでしょうけど、牛若丸も少年スーパーマンです。これはお話しするまでもなく弁慶をやっつけます。

『義経記』ですと、五条大橋ではなくて清水の舞台でやつけるわけですね。弁慶ははじめお経の読み競べをして負けます。そこで弁慶は、そとへ出てこいというんで、外へ出まして、清水の舞台の欄干の上へひらりと飛び上がってしまつてやつつけられるわけです。それから、これはまあ私の領分ではありませんけれども、上原先生の御領分ですが、稚児聖徳太子、それから、稚児弘法大師、これはもう彫刻も絵も沢山ございますが、これはやはり日本の少年のそういうイメージが、稚児太子とか稚児大師といったような形でできてきているのではないかと私は思います。そして、次は青葉の笛の平敦盛です。十六歳の美少年でたいへん日本人には人気があります。

その次が天草四郎時貞。で、これはこの間見て参りましたように、銅像になつていゝのです。銅像はあまりいい銅像ではありませんでしたけれども(笑)、天草四郎だけが立派に銅像になつていゝのです。現代のものでありますけれども、ああいう天草四郎時貞という、これは全く素姓は解つていゝないやうです、歴史的にいろいろ調べて、読んでみましたけれども、解つていゝないんですね。そして小西行長の子孫だとか、関係のものの子孫だとか、キリストの御使

いだとか、いろんな伝説がありますけれども、ともかく大変な天才少年でした。その天才少年が、かつがれてあいつうリーダーになつたのです。

それから私は市川團十郎というのがどうして江戸の大変な人気者になるか、ということもやはり少年スーパーマンという形だろうと思ひます。初代の團十郎は十四歳で登場致しまして、一躍大スターになつて参ります。二代目が十七歳で團十郎を襲名します。三代目が十五歳で襲名致します。四代、五代はちょっと歳をとりましてからですが、六代目が十四歳襲名、七代目、八代目はいづれも十歳で襲名してゐるんですね。まあ、こういうことはおそらく外国にはないでしょう。日本の、しかも市川團十郎というのは江戸の花といわれました、そういうのが、七代目、八代目は二人とも十歳で襲名してゐて、「助六」を演じてゐます。

それから天明の打ち毀しに前髪の少年が出現します。これは山東京山の、『蜘蛛の糸巻』という随筆に書いてあります。この本には当時のいろんな、社会情勢なんか書いてありますが、そこに、天明の打ち毀しの時に前髪の少年が現われて、飛鳥の如くかけ回しまして、そして、見事な働きをしたとあります。そして、打ち毀しの人達は盗みを一切

させないという、そういうリーダーになったのだ、という
ようなことが、書いてあるんです。実際、天明の打ち毀し
は米屋なんか全部やられるわけですけども、盗みをして
打ち毀しの連中が非常に私腹を肥やすといったようなこと
はなかったようであります。非常に面白い打ち毀しなんで
すが、その先頭に立ちまして活躍したのが、白装束の前髪
の美少年であった、というのであります。まあ、それで後
はもう大衆文化でいろいろ石川さんの得意のところの少年
がいっぱい、まあ、現在のテレビだとかマンガだとか、い
っぱい登場してくるのも、私はヤマトタケル、牛若丸、稚
児太子、稚児大師、敦盛さん、天草四郎、市川団十郎、天
明打ち毀しの美少年といったような、そういう、ズーっと
一つの日本の少年スーパーマンの伝統といったようなもの
があるのではないかと、思っております。それ
で、あそこへ行って少年のことなどをお話しております
ら、石川さんから、ポラリゼーションという、大変興味深
い心理学のお話を伺ったわけで、ポラリゼーションとい
う、僕のスペルが間違っていて杉山さんに直して頂いたん
ですけれどね(笑)。

石川 いえいえ。

西山 そしたら、野口さんとか斎藤さんなんか、ギリシ
ヤにいろんなそういうのがある、ということ、たちまち
一寸法師とか何かの話が野口さんから出てくるというよう
なことになったわけでございます。それでまあ、全部の方
から御発言がなくてもですね、まず、私が申しましたよう
なことで、石川さんがポラリゼーションの心理学のことを
お話になったことにつきまして、石川さんから御説明頂い
て次々に御発言頂きます。

ポラリゼーション

石川 それでは、ごく簡単にやります。ポラリゼーション、
ポーラ (Polar) というのは、北極、南極の極というこ
とですよ。要するに、社会運動の心理学というのが、社
会心理学のテーマの一つありまして、ここに持って参りま
したが、キャントリルというプリンストンの亡くなりました
た社会心理学者が書いた『社会運動の心理学』というのが
あるんです。もう今から十七、八年前に南博先生と訳した
ものなんです、この中にですね、ポラリゼーションとい
うのがかなり重要な概念としてでてくるわけです。です
から、もともとは、まあ、天草四郎などが西山先生があげら

れている例の中では非常にうまく重なると思えますけれども。ある特定の集団が形成されて特定の目標の実現のために集団行動をすると、その集団行動のなかでおこってくるのがポラリゼーション、成極化っていうんですね。一つのポーラに集団の心理が収斂されていくという、集まってゆくとのことなんですね。それが一つの大きな心理的な力になってくるという考え方なんです。では何故、そのポラリゼーションが起こってくるかというと、多くの場合、社会運動が起こるのには不満があるわけですよ。経済的な、或いは宗教的な不満とか、いろんな不満がある。その不満を実現させたいんだけど、解決したいわけだけども何か方法がわからない。で、まず人間はですね、ここでもう一つ重要な概念としてでてきたのが、「意味への欲望」という概念なんです。一体俺達はどういう状況にいるんだろうかということですね、意味づけたい、或いは誰かに説明して貰いたい、そういう意味への欲望というものがでてくる。その意味への欲望を、ある意味で一つの方向に差し示してくれるもの、そういう人間が大体いつも出てくるわけなんです。で、あの一揆の場合だと天草四郎がおそらく意味への欲望というものを、それは μ 、 π かも知れま

せんが、与えてくれたような集団的な心理をそこで形成するということになったのです。それでですね、これは典型的なケースでいいますと、モップの、リンチ・モップの心理学というのが最初にあるんですね。今ではアメリカはそんなにやりませんけれども、一九三〇年代位までは、リンチ・モップっていうのは極めて日常的に南部ではあったわけです。このリンチが何故されるんだろうか、起こるんだろうかということについての解釈では、従来は、俗にいう精神分析なんです。黒人がですね、ベニスが大きいと、非常に精力的であるという。大体強姦事件が多かったことがその発端とされているのです。で、黒人の精力が非常に強いということ、説明されてきたんですが、そうじゃないんだということ、経済的な、或いは労働条件の不平等ということが基本的な原因ではないかという説をたてたのが、このキャントリルという社会心理学者なんです。プア・ホワイトって、スタインベックなんかに出ていますよね。

杉山 いや、コールドウエルです。

石川 ああ、コールドウエルね。そのプア・ホワイトがですね、南部のコットンフィールドで労働をするわけですよ。

が、従来の黒人と、それから貧乏白人との間で労働市場をめぐって潜在的な対立が非常に昔からあるわけです。それが、一番深いところにあつて、その不満が黒人が強姦をしたらしいという情報に収斂しちゃうわけです。そこでポラリゼーションという情況が起こってくる。それが一つ。それからもう一つは、社会運動としてのリンチ・モップが発生した場合ですね。この後にでてくるのが、ヒトラーのナチ党の形成過程。それからオックスフォード・グループについていう、今は聞きませんが、MRA（モラル・リアーマメント）、道徳再武装ですね。その前身をオックスフォード・グループといいます。皆この強力なリーダーが必ずいるわけです。このリンチ・モップの場合はですね、蜿蜒と長い話なので省略しますが、ある南部の町で黒人の労働者が給料を貰いに行つたわけです。ところが雇い主がいなくて、たまたま奥さんしかいなかった。で、お金が今ないから待ってくれと、言われたわけですが、そこでその奥さんと黒人労働者との間にいざこざがあつて、黒人がちょっとおどしたわけですね。その、おどした、という事で彼女が悲鳴をあげる、その悲鳴がすぐ強姦という形に転化してしまふ。それがきっかけとなつてで

すね、最初は五、六人だったんですが、最後には二千人以上の人間が集まってくるんです。二千人の集まった集団のなかで、非常に暴力的に転化する契機があるわけですが、それは何故かわかりませんが、上から下まで真つ赤な洋服を着た中年のおばさんなんです。これがひいひいわめて、殺せ殺せと。ここでもまた、もう一つのポラリゼーションが起こるわけですね。成極化が起こるわけです。とうとう最終的にはですね、黒人をぶら下げて、そして性器を切っちゃったり、勿論殺すわけです。そして身体を焼いて、州の兵隊がやってきて、今度は戦争みたいになつちゃうわけです。そのプロセスが書かれているわけですけれども、要するにそこでもですね、経済的な潜在的な不満というものがあつて、そこで簡単なことからポラリゼーションの心理がおこる、という説明は一貫して適用できるんじゃないかと思うわけですね。ポラリゼーションというのは、そういうことなんです。それともう一つ天草四郎の場合、私、面白いと思うのは、あのお墓を建てたのが母親ということなんです。

母と子

西山 母親です、ええ。

石川 これは、もう一つ別の話題になりますが、大衆文化の「型」としては、母子関係、或いは心理学でいうと母子一体感という言葉がありますけれども、それがですね、一つ重要な大衆文化を支えるパターンとして議論される必要があるのではないかと、という風に思いますね。例の継母ママがテーマとなった母物だとか、「一本刀土俵入」なんかもそうですね。「隙の母」だとか。それから、松本清張さんの作品に意外に多いんですよ、母親との交流を描いたものが。で、あの人の場合、非常に珍しいんですが「鬼畜」という短編があって、これは映画にもなりましたが「鬼畜」とね。これは従来の継母ママという母物映画と全く逆のパターンで、徹底的に悪い母親がでてくるんですよ。子供を殺して、三人位殺したのかな、あれは。すごい作品なんです。まあ、こういう悪い母親というのは、比較的新しいパターンなんですけれどもね。要するに、トータルにいうと、母親というのはもう善のかたまりみたいな、で、そういうパターンが大衆文化には明らかに定着しているんじゃない

か。その意味で天草四郎の母をみると、何となく母親と天草四郎の関係というものが、イメージされてでてる。所謂大衆文化の受容過程の心理と何か、お墓自体が非常にこり重なるところがあるんじゃないか、という問題点も一つありますね。それからもう一つの話題としては、これでやめますが、最近はやる、ニューミュージックというのがありますけれども、井上陽水だとか吉田拓郎とか松任谷由美とかですね。まあ成城の学生なんか好きな音楽ですけれども、このニューミュージックの分析を人間関係レベルでしますとね、母子一体感が強くでてくるわけです。さだまさしなんかも典型なんですけれどもね。初期の作品で「精霊流し」、あれは長崎ね。あれはおじさんが死んじゃって、何かそういう話なんだな。

野口 自分の恋人だったよ。

石川 恋人だったか。肉親がね、テーマになっている歌が非常に多いんですよ。その中で、母親がいくつかでてきますけれども、「無縁坂」なんていうのはその典型の一つですね。あの本郷に無縁坂っていうのがあって、そこを小さい頃母親に手を引かれて上り下りしていた、その想い出を歌ったものなんですけれどもね。その他、母親をモチ

ーフにしたニューミュージックっていうのが、非常に多いんです。それから、もう一つが、これは僕らがよくやるんですが、過去・現在・未来に分類するんです、歌の世界をね。二百曲ばかり集めて。そうしますとね、過去が二五パーセント位でくるんです。四曲に一曲は過去を歌ったものなんです。で、その過去が、大体パターンとして母親との想い出に収斂してゆくという形が多いのです。ニューミュージックなんていうのも非常に新しい筈なんですが、^{母はも}母物と同じような母子一体感のパターンというのが、何か根底を支える一つのものであるらしいということなんです。ですから、大衆文化の分析をする上では、母親と特に男の子ですね、父親と娘っていうのはあまりないんですよ、これは。で、そういう問題が一つある。現実には、最近新聞や何かでよくでてくる、母子相姦の件数が非常に増えてきているという現実があるわけです。で、おそらく、これからの母子一体感が非常に強くなった先にはですね、母親と息子との所謂近親相姦の性関係というものが、もっともっと増えてもおかしくないという風な予測をする人もいる位なわけです。少し長くなりましたけれどもそういうことです。

西山 どうも有難うございました。そこでいろいろありますが、齋藤先生からギリシャでの少年のお話をお願いします。

西洋の少年 URKIND

齋藤 もう時間もございませぬし、かいつまんで非常に簡単に申し上げます。私、そのことを専門にやってみせられけれども、皆さんも名前は御存じと思いますが、ケレニーという、ハンガリー出身の神話学者がいます。ケレニーはハンガリー人ですから仕事はドイツ語圏内ですまして、有名な深層心理学のユンクと共同の研究をしたり、トーマス・マンと非常に仲が良く、トーマス・マンとの交流も非常に深かった。そういうギリシャ神話学者ですが、ケレニーの研究によりますと、神様というものを表現する場合には、例えばゼウスは普通、壮年の姿をとってでてくる。ところがこのゼウスが全くの子供としてでてくることもある。クレタ島のゼウスというのはそうなんです。それからアポロンが例えば非常に若い青年の格好ででてくる。かと思うと、そのアポロンが髭の生えた壮年としてでてくる。それで、そういうものを整理しますと、神様にも一つ

の成長過程があるという風にとられがちですが、そしてまた事実、そのホーマーの神話なんか見ますと、神様が子供で、その次に大人になって、とそういうような話もあるわけですけども、しかし、考えてみると全くこれは変な話でして神様というのは死なないわけですから、死なないものに子供の時があつてそれから大人になって、ということはありません(笑)。ケレニーの解釈によりますと、要するにそれは違った角度から神様というものを理解しているために出て来る表現の違いなんだと。つまり子供として神様をギリシャ人が表現した場合でも、それは独立の神様である。そして彼の言葉によりますと、彼の言葉の使い方は非常に難しいんですが、Lebensfülle という言葉を使い、Leben は生きる、ですね。それに充実という Fülle という名詞をつけまして、Lebensfülle。一つの生命の完全な充実体として神様を表現する場合に、ギリシャ人は時には、子供として神を表現し、それからまた時には、壮年、壮者として表現する。だから別々に切り離して考えるべきだ。一つの一貫した、つまり、成長過程とか、バイオグラフィーみたいを考えるべきではない。そういうことをやると神話というものを理解できなくなる。これは確かに

まあ、一つの卓見だと思ひますが、神様を子供として表現した場合に、ギリシャだけではなくてですね、広く印欧語の世界の神話、ケレニーは文化的には非常に大きなスケールで、目で見えるものですから、いろんな国の神話などにも目を届かせます。まあさし当たって非常に解り易い例は、インドの神話で、「ラーマヤナ」という神が、子供として登場してくるわけです、幼な児としてですね。それでこの「ラーマヤナ」ですが、この世の中にも疲れ果てたある一人の隠者が、この子供と出っくわした。その隠者を子供がじつと見て言った。「お前はもうこの世に疲れているんだらうから、一つ私の中に入ってみる」。子供の大きな口が開いたわけですね。それでももうどうでもいいやというんで、隠者がその子供の口の中に飛び込んでみたら、およそこの地球上のありとあらゆるものが何でも揃っている。インドの神様までも全部揃っている。山もあり、川もあり、ですね。結局世界全体がその子供の中に入っていた。それで、はしからはしまで隠者は、その子供の腹の中を探索してみた。その揚句の果て、どこへ行っても同じだといふので、もう出してくれと、その子供に頼み、くしやみに送られて腹の中から隠者が飛び出して来る。そうい

う隠者の悟りみたいな話が、この神話にまつわっているんです。とにかく子供ではありませんが、「ラーマーヤナ」は世界全体、宇宙全体みたいなものであります。そして「ラーマーヤナ」というこの子供の名前ですが、これはサンスクリットでは、水をすみかとする者、という意味だそうです。水をすみかとする者というのは、これまた神話全体を考えてみますと、生物というのは水から発生するというこの考えはエジプト、それから中近東、それからギリシヤというようにひろがっています。御存じのようにタレスという哲学者がいますが、水は万物のもとだと言っています。ホーマーの詩の中では、オケアノスという流れが万物の元であり、神々の祖先でもあるということになっております。そういう目でみますと、「ラーマーヤナ」の神話というのは、総てが水から生れてくる、水を母体として生命が生じてきた、とそういう生命の原始形態を伝えていることになりそうです。つまり「ラーマーヤナ」というのは言い換えれば、ドイツ語でいう Urkind である。ドイツ語で Ur というのをつけますと原始とか元とかの意味ですが、それでその Urkind の視点で見ますと、例えばアポロンで

様として有名ですが、この神託の神様のアポロンが、最初にデルポイに乗り込む前にですね、まず自分一人で乗り込んでみても不便であるということとで一群の神官を引き連れてデルポイに乗り込むということとで、その時何をしたかといえますと、彼は海に飛び込みましてクレタ島の方から来る船をはるかに見やりながら、あれにクレタ人が沢山乗っているあやつらを自分の最初の神官にしようということになります。ところで、海に飛び込んだ瞬間に神様は姿を変えまして、ドルフィンになります。ドルフィン、ギリシヤ語では、イルカのことを、デルピスといっています。まずそのイルカになって、つまりデルピスになって、そしてその船に躍り上がって一同を心服させてしまう、そしてデルポイに乗り込む、とこういう過程になっているんです。ところがこのデルピスというのは、ギリシヤ語で終りの i のの所謂英語のドルフィンですね、我々のいうイルカというのは、ギリシヤ語の i のの意味では子宮動物か、子宮生物という意味になります。しかも海へ飛び込んでアポロンがドルフィンになるわけですけれども、それはやはりその、一番最初の生命の発現した形態という意味で、赤ん坊も意

味するわけです。つまりドイツ語の Urtind にも通ずるわけですが、今のアポロンの例ではつきりするわけですけれども、最初の生物はですね、魚の形態をとっていたことになりす。ギリシヤ哲学史で有名なアナクシマンドロスが最初そういうことをいいました、魚からやがて人間の形になってくる、魚に似た格好の生物が最初の人間であると。で、哲学史などでその所を解釈しますと、アナクシマンドロスというのは最初の進化論者というような話になるんですが、事實はそうじゃなくてですね、神話の段階をずっとさかのぼりますと、どこでも、水から生命が生まれたという一種の神話の核みたいなものにつきあたることになります。ですから、ドルフィンになった、或いはデルピスになったアポロンという話にはやはり、生命の原始形態といえますか、そういうものを、神話的に語るその語り口がそのままそこに出てるんだということになりそうです。ですから、Urtind を魚に似た形で説明する、表現するというのは、ずーっとずーっと古い神話、ギリシヤ神話よりもっと古い中近東からエジプト全体へかけての神話の発想法の一つなんだそうです、ケレニーに言わせますと。ですからその子供崇拜という考え方は実に根が深いんだというこ

とになります。そして、今のドルフィンですが、これは子宮動物でありまして、母親につまり似ているということですね。さつき石川さんがおっしゃった、その母子一体の觀念も非常に古い神話、原始的生命の発生を説明する神話ににつながるようになります。ケレニーの話ですけれども。

ですから神というものを子供として表現する、この考え方というのは実に実に古い、これがまあケレニーの説明なんです。こういう考えをずっとたどりますと、それがいろいろ変型しながら、あるいはまあ牛若丸になってみたり天草四郎になったりですね、そういうことになるんじゃないかと思えます。私の話とはとびとびで、御理解頂けなかったと思いますけれども、まあもし必要がありましたらケレニーの今のような話を『成城文藝』などに責任の一端を果すために書かせて頂いてもいいのですが。紹介的な文章にすぎなくなるかも知れませんが。

日本の URKIND

田中 スクナヒコナ（少彦名神）なんかどうですかねえ。
斎藤 日本でも、ですからそういうことを考えてみれば、いろいろ牛若丸とか、歴史的時代に入る前の神話段階

にそういうものがあるのかも知れませんが、Divingの発想というものは。

中西 私もそのスクナヒコナのことばを考えていたんです。いいですか。

西山 どうぞ、お願いします。

中西 その前にね、もっと近いのは若子わくとじゃないかという気がしますね。

西山 若子からどうぞ。

中西 若子という概念、若い子という。例えば久米くみの若子なんていうのは海岸の洞窟くわにいるんですね。水辺に住んでいるということにも通底しますしね。だから例えばそこでウガヤフキアエズノミコト（鸚鵡草葺不合尊）なんていうのは、やっぱり、海の荒れた日に海の彼方から来臨する神がいて、それがその洞窟の中に赤子の形で置かれるというわけですよ。そこからこうはじまってくるというわけだけれども。やっぱり、久米の若子その他の若子という形で出現する……。

齋藤 海から何かそういうものが来るとすれば、今の話とケレニーのいうのは近くなりますね。それからもう一つ言い忘れましたが、原始キリスト教の時代に、イエス・キ

リストを魚で表現するのがありましたね、非常に有名な。これはまさにケレニーにいわせると、非常に古い神話の繋がりだというんです、キリストを魚で表現するのは。

上野 あれは普通はギリシャ語の言葉の頭文字が……。

齋藤 そういつていますけれど、それは後で理屈をつけるわけですね。

上野 後で。

齋藤 ええ。

枳尾 中国のね、盤古パンコ神話、インドから来た。

我妻 それから、海と関係ないかも知れないけど、例の『日本書紀』の一書には、ニギノミコトというのは赤子で書かれていたですね。

中西 そうそう、ですからね、それも私、今言おうと思っていたんですけれども、要するに天孫降臨がね、真床覆衾マシラフキにくるまってくるわけですよ。

田中 大嘗会の。

中西 大嘗会の儀式もそうですよ。やっぱりその子供というものが、一つの根元としてやってくる。

西山 応神天皇もあそこで土の中に埋められておくというわけでしょ、朝鮮へ行く間ね、海のところへ。

野口 神話ではないし、また僕は昔話の専門家じゃないんで先生の受け売りなんですけれどもね。昔話の分類で、大きく本格昔話というのと、派生昔話というのを分けて、本格昔話というのはこう一つの一生を語った大体成功譚で終わるんです。で、その一部分をこう拡大したのが派生昔話で笑い話なんかはそこに入ってゆくんですが、その中に「ちいさごばなし」という一連のグループの話があります。先程からでております、一寸法師の話ですね、これは泡の船に乗って川から流れてくるわけです。桃太郎というのは、川から桃に乗って流れてきてそして生れる異常誕生譚の一つですけど、それで成長していくんですね。で、そういうさっき Ukand というようなのと、それから「ラーマーヤナ」で水がでてきたもんだから、私「ラーマーヤナ」の語源は知りませんが、ああやっぱり水と人だな、と思ったんですが、その「ちいさご」で、本当に一寸の小さいのが成長して鬼ヶ島の退治やったりですね。あ、桃太郎ですか、それから鬼退治したりして悪者をけちらして成功するんですが、それをちょっとこの派生の方にゆくとですね、例えば、派生じゃないが、「瓜子姫」の話なんというのも皆そうらしいですね。それから、もっとくだけ

た形、神の零落というように昔話の研究者はいつています、河童かわづまなんていうのも、清水崑の河童なんていうのは新しいんで、ああいうエロティックなんじゃなくて、九州あたりにも多い河童っていうのはこんなもの（手のひらにのる大きさ）なんですね。水がこの位あったらそこに住んでいる、そしてものすごく怪力がある。そして左甚五郎の話なんか、五島にはあるんですけど、つながっちゃって何かの河童たばうに頼んだところ、一夜にしてつくってしまったとかですね。それで河童は一種のトリックスターだと思いますけれども、智慧もあるし力もあるけど、一方すごく狡猾な部分もあるんですよ。ただ、あんまりそういう例を話し出したら、例えば、東北の座敷わらすなんかだってこんなちっちゃな人間であるし、こういうものが日本では、小さいだけでいうと、かぐや姫、竹の筒の中から生まれてくるし、という小さいものが非常に大きな力をもってますね、悪者をやっつける、そしてそれは皆自らやってくる、というこの型というのはいっぱい。それから一寸法師の話とか桃太郎関係の話というのは、日本だけじゃなくて類似した話というのはいっぱいあります。森の小人というの

は、なんで小人は森の中にいるかって、ちょっとこうわからない所についてやるとかね。

アイルランドの場合

西山 アイルランドなんかはどうですか。

上野 はい、今いろいろと思ひ出して、いたんですが、二つだけ、今直接の關係を申しますとね。一つは石川さんのいわれたボラリゼーションなんですけれども、社会運動で、その中でだんだんこう一つ主導的な人物がでてくる、しかもそれが今度は一つの象徴のようなものになってしまふ、と、いろいろの一つのおそらく典型的な例じゃないかと思うのが、実は新しいんですが、一九一六年のダブリンのイースター蜂起という、有名なイギリスに対する武装蜂起を記念する像に見られるんです。戦死した少年の像です。その時のリーダーだったのは、ピアスという若い詩人なんですけれども、この蜂起は第一次大戦中ですからイギリスも強硬で一週間で鎮圧されてしまつて、千人位が捕まつて、リーダー十六人が処刑されるんですが、その処刑されるまで、と、いいましょうか、ダブリンで蜂起があつて、そしてイギリスの軍隊に砲撃されて散々にアイルランドの義勇軍が負け

ている時には、ダブリンの市民はイギリスに味方しているんです。まあ、こういう大変な時に、イギリスも大変だしアイルランドだつてイギリスが世界大戦で負ければ共倒れになる。そんな楽じゃない時に、いわば国内でドンパチやつては大変迷惑だというんで独立運動に皆そつぽ向いているんですよ。ところが、捕まつて処刑されますと、銃殺されますと、毎日毎日処刑されてゆきますと、だんだん、彼等は実はただのはね上がりとか暴徒とかではなくて、自分の身体をはつてアイルランドを独立させようとしたんだというように、アイルランド人に理解されてくる。ついでこの間まで暴徒でくそみそに言われていた連中が、英雄になるわけですね。その連中の死を無駄にするなというんで、非常に大きな社会的な独立運動にまで広がつて、それは結局独立を勝ち取るわけなんですけれども、蜂起軍司令部のおかれたところは中央郵便局なんですけれども、その中央郵便局に今、一人の少年が盾をもって死んでいる像がある。それはアイルランド人の一九一六年の犠牲者達を祀っている像で、まあそれは象徴になっているわけなんです。中央郵便局に入ってゆく人達は、皆たおれている少年の足をさわつてゆくものですから、足だけびかびかになつ

ているんです。その少年はクハランという、アイルランドの伝説的な英雄でして、丁度日本というヤマトタケルノミコト位の感じなんですけれども、これは元々は犬の化身らしいんです。これが大変に強い、この前も申し上げましたけれども、ヨーロッパでいうとジークフリート伝説みたいな、そういう大変な英雄で、子供というか少年で、強いんです。ある程度の年齢まで行っているのかも知れないんですけども、大体、いつも若者なんです、どの話に出てくるのも。それが一箇所、ちょっとどこだったか忘れてはいますが、弱点があつてその所をあつて敵に見つけられて、戦鬪で負けて殺されてしまうのです。古くからのアイルランドの伝統的な、リーダーであり、シンボルなわけです。それが、一九一六年の独立運動の時に直接また思い出されて、死んだ十六人というのは二十歳代から年をとつてゐるのは四十歳代までの人ですけれども、その人達一人一人がそのまんまで英雄にはなつてゐる。彼等十六人全部の象徴が今度は少年になつてゐて、その少年が毎日、毎日人の沢山来る、かつての蜂起軍のセンターだった、郵便局にいつも祀られてゐるというわけです。ちょっと先程の石川さんの話がね、そっくりあるような感じで非常に面白かつ

たんです。それともう一つ、今子供の方の話でいわれた、小人こびとですけれども、これはちょっと違ふみたいところがあつて、アイルランドにはやはり地下に住む人とか山の人とか、それからまあ小人です、といわれる魔法の力、魔力をもつた変わったのがいましてね、それと接触しているいろいろいい事があつたり悪い事があつたりするんです。例えばこぶ取り物語とそっくり同じのがありましてね、ほほじゃなくて肩についてゐるんですけれども、いい人の方は、これは歌のうまい人で、丁度こぶ取り爺さんが踊りがうまいようなのと同じなんですけれども、それが巧い具合に小人の穴に連れ込まれて、そこで楽しく皆に歌を歌つてきかせたり、皆の歌をよくつくり直してやる。そしてお札にこぶをとつてもらいます。その後、今度はよそのお婆さんが来て、うちの息子も困つてゐるからというので連れていってもらつて、するとその息子は大変に根性悪いもので、前のこぶを取つてもらつたいい人が、折角いい歌を覚えてくれたのにその歌をめちゃくちゃにしたというので、おこられて、気がついたら二つこぶをくつつけられて死になつてた、家につれて帰つたが死んじやつたという話なんです。で、その場合の小人というのは何

かつていうと、征服されたアイルランドの先住民族です。昔のアイルランドはケルトですが、そのケルトのところから後からデーン人だのノルマンだのがやってきて、前の古い住民を皆滅ぼすか、支配してしまつて、そういうかつてアイルランドに住んでいたケルトの人達、まあ先住民族といいましょうか、それが全部後の征服民族に負けてしまふ。そうすると彼等が皆地下にもぐるか、山に入るか、小人になるかして、生きてるんです。生活はしているけれど、そして地下にもちゃんとした世界があるんですけれども、それが全く別の世界の人ではなくて普通の人間の生活と繋がっているんですね。

我妻 コロボックルですか。

上野 そうなんです。

中西 そうですね。

上野 はじめこれを知ったとき僕もコロボックルを思い出したんです。それはそうすると先程、一寸法師などで出てくるような、そういう子供がだんだん成長するというよりも、大人が一度に子供になつちゃうんですね。子供っていますか、小さくなつちゃう。で、小さくなつちやうって大きい普通のこの世の人間と共存しているんですね。まだ今

でも、西の方に行きますと、かなりそういう風に思っている人達がいる。実際そういうのがいるんだ、という人達は結構いるんですね。で、それは大変な金持ちなんです、そのチビは(笑)。ですから、それをつかまえてね、それに黄金のありかを教えさせようとする。うまくつかまえて黄金をせしめようとしたら、大変にこれは頭がいいですから、人間を巧いことだましてひょいっと逃げちやうってね、つかみかけた黄金がまただめになつちやうったというような、そういう昔話が沢山あつたりします。アイルランドで、たまたま今のお話に直接つながるところだと、随分似たものがあるものだと思つたりしたんです。

西山 そうですねえ。世界の各地にあるのがたいへん興味深いことです。

我妻 ポラリゼーションというのと、ジャンヌ・ダルクなんかもそうなんですか。

石川 そうでしょうね。

中西 さっきのね、「意味への欲望」というのをおっしゃつたでしょ。

石川 うん。

中西 その意味っていうのがね、もう少し何か議論し合

「つたら面白いんじゃないかと思っただんですけどねえ。例えばジャンヌ・ダルクもそうだけれども、すぐ思い出したのはねえ、「ええじゃないか」ね。お伊勢参りとかね。「ええじゃないか」なんていうのも、あれも一つの無意味への指向みたいなものもあるでしょう、わーっと、集団的な情念的なものだから。ただそれを意味といった時には、その意味はどういう意味なのかね。

西山 あれは「おかげ参り」といっていますが、『文政神異記』なんかには一日に二十万とか三十万という集団がお参りしたといえますから。大体六十年に一度。

杉山 意味づけの意味っていうのは、「型」なんじゃないの、「型」を求めるんじゃないの、「極」を求めて、「石川さんが言ったね。

石川 御当人にはね、そんな近代的な意識はないんだけど、心理学的に解釈すると自我が崩壊する寸前なわけ。で、その自我を何かで補強したいのよ。そこで意味を求める、そういうことなんです。

中西 やっていること自体は、あまり意味はないけれども、指向、欲望として意味があるわけですね。

石川 だから表現欲とも通じるんですね。

西山 あれなんかはね、「おかげ参り」というんですが、全くパターンですよ。お伊勢様というパターンですよ。それでお金も何も持たないで旅ができるという、それで、施行せぎょうというものがあってね、その施行を受けるものですか、御飯を食べることができ、草鞋も宿場賃も全然いらなくてお参りしてきて帰ってきた、ちゃんと主人が出迎えないわなきゃいけない、赤飯をつくって出迎えて御苦勞さんといわなきゃならない、そういうことになって(笑)。やっぱり本当にあの、それでも六十年ごとそれがね、行なわれるというのは、それはパターンですな。

つぎは上原先生から聖徳太子の、弘法大師、稚児太子なんかと関係があるかと思えますけれど、聖徳太子もやはり若い姿が沢山ある、そのこととか、先生は東西古今にわたって方々歩き回っておられますので、広い立場からどうぞお話を頂きたいと思えます。

聖徳太子

上原 只今、聖徳太子のこともございましたが、生前の聖徳太子の事蹟の中で私は、最も注目すべき問題の一つに、十四歳の時に排仏崇仏の両派の合戦におけるシャーマ

ンの働きのあると思います。つまり物部と蘇我の争いの時にですね、蘇我の側に加わって参戦するわけですが、非常に物部守屋の抵抗が強くて、敗色が濃く、蘇我軍は三度退いたという風に『日本書紀』は書いておりますが、その時に少年の厩戸皇子がですね、四天王の像を白膠木という木で刻んで、それを前髪にさしてですね、この戦いに勝利を得たならば寺を建てて、四天王をお祀りすると、まあそういう風に言って勝利を祈願した。それで全軍奮い立って敗色の濃かった蘇我軍がにわかにも勢いをもり返して、物部守屋を討ち、戦いを勝利に導く。まあいわば、ジャンヌ・ダルクのような戦いをするわけですが、しかしそうした僅か十四歳の少年の起死回生の奮戦ぶりというものは、従来日本史家の間でもですね、非常に疑いもたれて、これは恐らく四天王寺あたりから出た縁起に過ぎないのであるというわけでした。十四歳の少年がそういうことをやる筈はないんだというのが、もっぱらの定説であるわけです。実は、最近にも、坂本太郎先生のお書きになった『聖徳太子』のなかでですね、私の聖徳太子論への批判としてそれをおっしゃっておられるわけです。

しかし、天平十九年に撰せられた『法隆寺伽藍縁起並流

記資財帳」を見ますと、法隆寺の寺領がずっと書かれています。その中に、大和川ぞいの物部の所領が記載されておりますが、それを子細に検討してみますと、大体物部の旧所領というものを、少なくとも大和と河内に於ける物部の所領を、法隆寺と四天王寺でそれぞれ分割して自分の所領にした痕跡が非常にはっきりあらわれてきているんです。そうなることはどうしても太子に何らかの功績があつて、論功行賞として、太子由縁の寺である法隆寺と四天王寺に旧物部領が分け与えられたと、そういう風にしか考えられないわけです。これは私は、太子の蘇我物部の合戦における軍功というものは、そういう形で非常にはっきり実証できるのではないかと思います。

ところで、実は少年である聖徳太子が全軍を奮起させたという事は、少年だからということに疑いもたれてきているんですが、これは逆であつて、少年だからそれがやれたんだと、そういう全軍を奮立たせることがですね。とくに白膠木の木というのは、霊木だそうにして、その霊木でもって四天王像を刻んだというところに、また一つ意味があるんだと思うんですけれども、一種シャーマン的な役割をですね、少年太子が果たすことになる。それ

は、聖徳太子の問題だけに限ってという疑いを持たれるかも知れませんが、古代新羅においては、六世紀から七世紀にかけての新羅においては、花郎という制度があつて、非常に眉目秀麗でまた才能のある少年が花郎に推戴されて、青年の戦士団の長として君臨するということになるわけです。そういう制度は古代の新羅に見られただけではなく、実は、東南アジアなんかにもですね、台湾の高砂族にもありますが、そういう青年だけの、若衆だけの集団の訓練というのがあるわけです。そういうものが新羅にあつて、眉目秀麗の少年を推戴する。まあ、かつては少女を推戴していたらしいんですけども、ある時期から少年が推戴されるようになった。そこに仏教が入つて来りました折に、その花郎がミロク信仰と習合することになって、美少年の花郎というのはミロクの下生した姿であると、つまり兜率天からおりてきた救世主として、ミロクは未来仏でありますから、そういう救世主として戦士団を率いて戦うことになりました。これが、戦いと非常に関係がありますのに、こういう例がございます。新羅と唐が連合して、百済と倭、つまり日本ですね、と戦つた時に、例の百済と倭が敗北しました白村江の戦い等であります。それをリードし

た將軍が金庾信きんぐゆしんですが、その金庾信將軍はやはり少年の時に花郎として推戴されております。非常に厳しい訓練を受けますが、それは慶州の近郊に断石山だんせきという山がありまして、その山の、これは非常な深山なんですが、そこでもつて彼は習練しています。その山に断石山とよばれるようになったのは、石を断つ山という名前がついたのは、金庾信は山に登つて自分の剣をですね、天に向かって打ち振るわけです。それによつて天の感覚を得ました刀でもつて外敵を殲滅することを神に誓いますが、その刀で石を切つたところが石が断られたというので、断石山という名前がついている。これは日本の古代のですね、いわゆる魂振りたまかですか、魂振りに非常に通うものがあるんじゃないかと思うんですね。天に向かって剣を振ることによつて神の霊を得るというようなことはですね。それが荒御魂あらかみたまになつてゆくんでしょうが、そういう古代の日本の魂振りと同じような信仰が、まあ花郎の中に見られるわけであつてですね、そういう風に見てきますと、厩戸のいわば神がかり的な若武者ぶりというようなこともですね、新羅の花郎と対応して見る時には、やはりあり得たことだと思ひます。あれは実際に歴史的な事実としてですね、充分に考えられるのではな

いかと。で繰り返しますように、少年だからこそ非常に意味があったわけなんで、でまあ、そういう風に考えております。

西山 有難うございました。これは、非常に面白いお話でございますが、聖徳太子の稚児姿っていいですかね、絵画にも彫刻にもなっていますもので。

上原 はい。

西山 絵や彫刻でよく稚児姿の聖徳太子がでてきますが。あれはやはりそういう聖徳太子の十四歳少年のスーパーマンぶりというようなものも、背景になってああいうものがでてきますか。

上原 どうでしょうか。あれは必ずしも十四歳とは思えないんです、柄香炉をさし出しているのがありますね。太子の孝養像はですね。

西山 ええ。

上原 それは直接には私はないんだと思います。

西山 ああそうですか。

上原 で、むしろ平安の終りから鎌倉に入りますと、そういう武人としての太子よりは、どっちかという伝暦の影響もあっていろいろと神格化された太子像の方が浮き上

がってきましてね。

西山 ですけども、それもですね、私などこう考えると、私の郷里のお祭りの時にね、頭人ちまにというのができるんですが、その頭人というのは、五歳から八歳迄の両親の揃っている男子というのでね。それがくじ引きで神様の先導役になるという、いわばその神様の象徴みたいな形で稚児が選ばれるんですね。そういう稚児の形といったようなものは、非常に古い時代の聖徳太子の稚児像とか弘法大師の稚児大師とかというようなものと、日本の精神生活の中における神様というか、仏様というか、そういうものと繋がってくる、つまり、超人的なそういう存在というものが、根にあつてそうなっているんじゃないかと思うのです。

上原 そうでしょうね。今、私はちょっと花郎のことだけ考えてましたからね。そういう武人の姿をとっていないんで、そういう風に申し上げましたけども、超人的な所謂、神童としてのね。

西山 神童としての。

上原 それは太子像でしょうね、充分に。

西山 じゃないかな、ということですね。

上原 それはいえると思いますね。

西山 そうですか。

日嗣皇子の造型

中西 大変面白く伺ったんだけど、もう一つですね、

別の方向にパイプがつながるんじゃないかという気がしているんですが、それは何かといいますと、太子という日嗣の皇子という立場、それがあるんじゃないかという気がしたんです。ということはどういふことかといいますと、今実際に数をもって言えないんだけど、聖徳太子が何歳の時に何があったという風なことを私は天智天皇と較べてみたことがあるんですね。そうしますと、非常によく合うんです、出来事が。彼が引き受けている政治上の困難さとか、それを克服した時の業績とかいうものが非常に良く合うんですね。だから何故天皇にならないか、とか、次にまた即位をのばしたということも、ずっとわかってくる感じがします。そうしますと、これは明らかに天智、つまり中大兄皇子という皇太子ですね、日嗣の皇子、その造型に、その先人であったところの聖徳太子像というものがあって、それをパターン化する形で、でき上がっているんじゃないか、という気がしたんです。そこからもう少し先に興味を伸ばしてみますと、何人か、悲劇を背負いこんだ皇子、皇太子がいるんですね。それは有間皇子、これは皇太子ではないのだけでも孝徳天皇のたった一人の皇子で、皇太子に準ずる立場という、そしてこれは殺されたわけですね。

西山 そうですねえ。

中西 それから日嗣の皇子であった木梨軽皇子がいるわけですね、允恭天皇の皇子で、皇太子だったんだけど、なれなかつたわけですね。それから大津皇子という男がいて、これもやはり天皇になれるような力を持っていたんだけどもなれなかつたというわけですね。こういう人間像を並べてみますと、非常に共通するものがあるんですね。で、それは何かというと、例えば、木梨軽皇子の場合には、決然として運命を引き受けましてね、そしてその決意の中で行動して行って、遂には身を滅ぼしてゆく。そういうタイプというのが、木梨軽皇子の場合とか、有間皇子とかにも考えられるわけですね。そしてそれが、どういう時におこるかという、たまたま政治上の危機におこってくる。今の、物部と蘇我の崇仏の関係でしたけども、やっぱ

りこれも大きくいえば一つの政治上の争いであつて、そういう時代。それから木梨輕皇子の場合には、允恭天皇の亡くなつた後という、皇位の空白の時代。それから有間皇子の場合も、今女帝を仮に戴いているという風な時。大津皇子の場合も天皇が亡くなつた後、という風なところで全部ずっと続いてくる。そして更にその中で、非常にティピカルな英雄像をとるものが、ヤマトタケルノミコトと、雄略天皇ですね。で、雄略天皇は「当時童男なりき」と書いてあつて、少年だと書いてあるわけですね。そしてそのやっていることが、ヤマトタケルと非常に似たようなことをやるわけです。これもやはり市辺押磐皇子という人間が殺されたという事件からんでいるわけでありまして、それから、ヤマトタケルの方はやはり皇太子でありながら、天皇から疎外されるという風な情況の中ででてくるわけですね。ですから、そういう少年像の、勇敢な少年像をとるタイプがどういふ情況の中で生まれてくるかということを考えますと、ある意味では一つの危機の情況の中でそういう造型が行なわれる。そしてその造型されたものが、どういう役目をするかという、その危機の中である運命を引き受けて、それを一つの打開する方向へ持ってゆくという風な形

へもつてゆく。しかし、それはある場合には私は悲劇の主人公としてやがては身を滅ぼしてゆくということで、これは梅原説ですね、皆皇太子という立場ででてくる。だから太子ですね、聖徳太子、日嗣の皇子、そういう太子の或る役割としてそういうものがあるんじゃないかと。その太子とは何かというと、次に王になる人間ですから、未発の王といえますかね、未だ生れざる王といえますか、そういう未生の王というものが、そういう形をとるのだという形で、その少年像が出てくるんじゃないか。だから花郎の影響も勿論あると思いますけれどもね。もう一つそういう風に。最後に言いたいことは、ある志を述べるといふことをしているんですね、そういう人達が。例えば木梨輕皇子も死ぬ時に歌をつくつて死ぬという。で、これは臨終の時に詩を作るといふのは日本人の考え方の中にないんで、中国の考え方が日本に入ってきてからそういうことがあるんですけれども、大津皇子もそうだし、有間皇子もそうだし、聖徳太子も十七条の憲法をそう考えればそれに準ずることができるんですけれども。まあ聖徳太子の場合には、そういう情況の中からやや平和な造型力というものが加わつていて、ちょっと例外になるんだけど、それをむしろ歴史

の力の中の力学に於ける一つの文明的な、平和的な造型という風に考えましてね、他をひっくくってみたらどうか。

上原 それね、少なくともね、七世紀、大津皇子以降の問題としてはそういうこともいえるのかも知らんだけれども、太子については、今、皇太子という風に言われたけれども、十四歳の時の太子というのは、太子でも何でもなくて、むしろ諸皇子の中では、歳も若いし、それから、既に皇太子がいましたね、あの時には、竹田皇子だったか何だかねえ。だからちよっと違うんだなあ。

中西 いや、将来太子になる人間でいいんです。太子の立場、というのではなくて。ですから、有間皇子だって太子じゃないんだけど、そういう立場、そういう人間が……

西山 でも有間皇子っていうのはね。一番太子になる可能性を持っている人でしょ。

中西 孝徳天皇の子供としましてはね。

西山 ええ、有間皇子はね。そういう意味では、太子はそういう風に考えられますよね。

中西 日嗣の皇子についての特殊な考え方というのをもう一ついれてみたらどうでしょうね。

上原 歴史的な事実の問題としてはですね、その時の厩戸皇子は全く皇太子に将来擬せられるという保証は何もないんですよ。

中西 ですから、将来太子として認識される人間が、やがてだんだん型化してくる。

上原 はいはい、型化ね。

中西 そういう話の一つが、白膠木の木を刻んで叫んだということになるのではないか。

斎藤 型が一つ先行してましてね。そしてその型にあてはめて造型する。造型される人間にある種の共通性がある、そういう問題ですね。

中西 そうですね。

斎藤 なかなか面白いお話ですね。

上原 それはまあ、一つ、型化されていくことはね、事実だと思うけれども。

斎藤 神話を造型するというような場合に、歴史的事実とか、それはいろいろあるんでしょうけれども、その歴史的事実を神話化する場合、その中心になる人物に一つの特徴というものがある。

上原 ええ。

齋藤 共通性というものがあると思います。

上原 それは言えますね。

中西 だから逆に言いましたね、例えば天草四郎は実は皇太子、なんていうのは人を驚かすわけだけれども、そういう何か、例えば神の申し子であるとか、やがて神になる人間であるとか、そういう何か未生の、いまだ生れざる生命を持ったある絶対者、というのですかね、そういうものに對する造型力が今のポラリゼーション。

齋藤 ポラリゼーションとしてはその通りだね。神話を作るといふ場合は確かにそうですけどね。神話は一つの型がありますから、その型で、ある特殊な人物を皆、こう整理すると。その整理される人物も何かしら共通性があるということですね。

貴種

西山 今、古代史の問題ですけども、つまり、日本の場合だと『古事記』及び『日本書紀』といったような、或いは『古語拾遺』とかね、というようなものが一つの、語部とか何とかが伝えてきたようなものを、文献化しなければならぬ。そうするとやっぱりどうしても、一つの型と

いう問題がね、出てくるわけですよ。そうすると、ヤマトタケルだって、一人の人間であった筈は全くないので、いろんな行動をとっていたようなのがたとえは大和朝廷の天皇家になる、そういう家と、肩を並べて権力者になろうとしていたような、群小豪族みたいなものの姿が、ヤマトタケルという形になってくるんだらうというわけです。そういうたくさんいた人たち、共通する人たちを一人の人間像として、語らなければならぬという時に、それは型としては後の聖徳太子とか、或いは中大兄皇子とかというように、そういうのと、非常によく似た類型で作りあげられていく。その類型も、『書紀』の類型と『古事記』の類型では随分ヤマトタケル自身だって変っているわけで、そういう意味でどのようにそういう型ができてきているかということとは非常に重要な問題ですわね。

上原 その場合にね、さっきの花郎なんですけどもね。

金庚信の場合もね、これはやはり私自身貴種だと思わうんですがね。

西山 貴種ですね、やっぱり。

上原 貴い種なんですわね、今の型にはいってゆきますけどね。

西山 やっぱり貴種でないかね、スーパーマンには恐らく古代ではなれないんじゃないでしょうか。これは古今東西を通じて、どうでしょう。ギリシヤなんかもうそうじゃないですか。

齋藤 例えばイリアスの英雄、アキレウスなんかでも、あれもこのごろの比較文学みたいな形でゆくと、中近東の方の話と型が似ているんですね。話の展開の仕方。英雄をはじめ作る時に、何かそう合わせるんですね。一つどこかに大本があります、造型する場合。ギリシヤよりも中近東の方が早いですから、成立が。ギルガメッシュ神話なんていうのは英雄神話ですね。ギルガメッシュ神話だから、イリアスという英雄が仮にいたとしても、トロヤ戦争は実際あったわけだし、トロヤ戦争で一人英雄を造型する場合に、ギルガメッシュ的な型に合わせるという、これは確かにあったらしい。やはり若いんですがね、アキレウスは。

西山 はあ、若いんですか。頼朝のような人物だって蛭ヶ小島でね、どうしてあれだけのことができるかというところ、あれはやっぱりね、源氏の正統であってね、しかも京都の貴族生活をした貴族であって、そういうことではないとやはり頼朝という武家の新政権は出てこない。

齋藤 そのもとに神話造型力的なものが周りにあったのかも知れませんがね。

西山 やはり、アキレウスとか、ヤマトタケルとか、同じ一つのパターンが、日本にも、日本のみならず世界の共通したものがあるとは思いませんか。どうでしょう我妻さん、このあたりは。

我妻 そうですねえ、まあ、頼朝の場合は貴種ということもあるでしょうけどねえ。貴種崇拜というのも確かに平安から鎌倉あたりは非常にありますねえ。ただ、歴史的なことになりますとね、話は面白くなつちやうなだけど(笑)、中西さんとか上原さんの方には大変面白い話を(笑)。

中西 いつも面白すぎるという……。

我妻 それは歴史的な現実として頼朝が、幕府を作る、或いは武家の棟梁としてかたがたがれてゆく場合には、それは、貴種でなくて頼朝以外の何者も、なれなかつた。これは事実ですけれどもね。ただ、先行きどうなるかわからない場合、まあ、石橋山の合戦で敗れるとか、或いは富士川の戦いで平家を追い払ったというふうな、あの段階で頼朝ってというのは関東武士にとって何者だったかということ

やっぱり問題でしょうね。むしろ、関東の武士というのは頼朝を棟梁にはすえるけれども場合によっては京都政権とは別に政権を立てて、それで京都の皇子様か親王をつれてきて親方にたてると、そして東国を作るといふ、そういう、まあ、別枠な国家を考えるような武士達もいたかも知れませんが、せんしねえ。だから、以仁王なんていうのは、天皇になるものという認識で頼朝は考えていますし、だから頼朝方向にくっついてくるという、そういうこともあるわけ。実際問題としては京都から天皇の子供や何かを連れてきて東国国家は作りませんでしたけれど。ただ、頼朝が政権を確立するまでには、まだまだその頼朝でなくて、頼朝のもっと上に立つ、京都の天皇ではなくて別の天皇をいただくかも知れないような、情況というのはいったくかも知れませんが、ね、独立国家を作るといふような。そういうようなものが坂東の武士達の間にはあったかも知れない。

西山 まあ、あったかも知れないんですけども、しかし頼朝というあんな流され人がね、流され人がああいう勢力をもつてくるというのは、頼朝という人物の氏素性という、そういう貴種であること、理由というのはい、非常に大きな要因と。

我妻 それはそう思いますね。

西山 牛若丸もやっぱり、頼朝の弟の牛若丸も同じで、牛若丸がすごい勇氣をもっているというのは、やっぱりこれも貴種で、悲劇的な人物だからなおこっちの方がスーパーマンになっていったんでしょう。

我妻 貴種というのは、それは確かにありますね。

両性具有

田中 そういう場合は、セックスの方には全く関係ないんですか。中性化され、まだ男性とも女性ともならない、所謂、乳房も大きくならない、といって、あまりにもむくつき男ではない。そういう中性化の段階における人間というか。

西山 日本の場合は全部、上原さんのおっしゃったような、花郎といったようなね、貴種で非常に眉目秀麗なイメージになるんです。義経なんていうのは、事実はいあまり秀麗でなかったのに……。

田中 それから、森蘭丸のように、あそこまで生臭く同性愛とか少年愛的になるものなのか、それともあそこまではならないで、今言ったような中途半端な状態の美しさ

というものがいいのか。

西山 非常に面白い提案ですが、セックスの問題はいかがですか。

尾形 整理する一つのポイントはそこにあると思います。

西山 やっぱりねえ。

斎藤 やっぱり一種の性的美でしょうね、中性的性というのはおかしいですけどね。

西山 根源的なものがね。

田中 観音さんが中性的になるなんてことと、同じ地盤じゃないかと、僕は思うんですけどね。

西山 なるほど。

我妻 中性と考えるか、両性具有という風に考えるか。

両性具有でしょうね。両性未発の状態というか(笑)。

西山 両性未発の貴種の眉目秀麗なる、という条件。それは、非常に大きな、スーパーマンのパターンの根源であるということが、どうも共通しているようですね、どの時代でも。現代でもそうでないといえませんか。それであれば男だろうか、女だろうかわからないような、大体今の漫画は男と女というのは、はっきりしてますわな。だけど

も、やっぱり話題になってずっと来ているようなのは、どうもそのようですね。

石川 シャンソン歌手の美輪明宏なんていう人は、天草四郎の生れかわりだ、と言ってるでしょ。あれも両性だもんね。

我妻 これはまあ、一種のやっぱり観念なんでしょうけどね。歴史上の義経というのはどうっていうこともないわけですよ。つまり、『吾妻鏡』なんかに出てくる義経っていうのは、いっこう、どうということもありませんけど。『義経記』以降になってくると、これは女性的で弱いんですよ。

尾形 『平家』ではまだ向歯反つて猿眼さるまなこ、といったぐあいのすずどき男なんです。それが『義経記』になると、眉目秀麗の貴公子になる。

我妻 もう弱々しくって、とにかく強いのは、弁慶と対した時だけ強くなって、その強さだけが義経の強さとして出てるわけですね。弁慶とっ外したらもう、うんと弱くなっちゃって。

尾形 とこが、弁慶という守護者がいつもついていて、というのですね、一つの型になっているわけです。

齋藤 そういう場合、一種の何と申しますか、伝記的にね、大人になってゆくとか、そういうことと関係ないんじゃないですか。遮断しているんじゃないんですか、牛若丸は。

西山 牛若丸の場合はね。

齋藤 遮断していると思う。

西山 遮断していませんね。

齋藤 ギリシヤの神様なんかの場合も、ですから完全に壮年になっている姿も出てくるわけですから。ただ、やはり断然少年として絶対者である、その魅力はすごいわけですね。だから、神様に第一、歴史があるのがおかしいわけですから、生まれて年とってゆくというのは本来(笑)、ギリシヤの神様の観念にないわけです。だけれども、色んな話が出てきますと、それを後でつなぐわけですね、伝記的に。そうすると妙な神様の伝記がで上がるわけですね。神様の伝記というのは、形容矛盾というか、おかしいものでして、だから牛若丸も完全に絶対化されているんですよ。後の弱々しい女性的な、完全に女性的な義経というのは、話の元が全然別なんじゃないかと思うんですね。作った場合、造型化した場合、造型したその、民衆の、誰か知りま

せんけれども、雰囲気と、それから、安宅関を越えるような弱々しい義経と、そもそも物語を作る動機が違うんじゃないでしょうかね。

森岡 セックスにしても成長にしてもですね、これはまあ自然的な発達の過程です。それを社会生活の中で認定をするわけですね。それは例えば、元服なら元服だと思わんです。ですから、先程の童といいますが、小さい子供がシャーマニスティックな神格を持つかの如く考えられたりするというのは、元服前の少年じゃないでしょうか。ここでは両性具有といってもいいし、或いは両性未発といってもいい。そういう情況ですね。先程、十四歳で軍陣の先頭に立って、聖徳太子の後光をあらわしたという、あの時代に元服があったのかどうか。それは私にはわかりませんが、社会的に大人と認定をされる儀式の前というところが、何か神に近いような特別の、普通の大人とは違う才能、能力を発揮する時期と見られたんじゃないでしょうかね。

前髪

上原 それは太子の場合ですね、非常にはっきり元服前

だということを言っているのはですね。四天王の像をかか
げる前髪というのはね、まだ元服前の髪だというのを、わ
ざわざ強調しているんです。

尾形 この前、帰り道に上野さんにちょっと申し上げた
んですけども、江戸時代に活躍するスーパーマンというの
は、やっぱり前髪をつけているんですね。その一つの典型
的なケースが『八犬伝』に出てくる犬江親兵衛で、これに
はさっきの義経に対する弁慶みたいな守護者が何時もつい
て行動するんです。犬江親兵衛の場合には、姥雪与四郎が
それですが、親兵衛のほうは最後まで稚児姿みたいな童形
で、しかも『八犬伝』の世界では一番頂点に立つ超人的な
活動をする。そういうのが聖性を帯びているわけです。去
年、うちに非常勤講師で見えていた徳田武さんという人
が、雑誌『文学』に「八犬伝の機微」という論文を書いて
いるんですが、それには、この前西山先生が御紹介になっ
た天保の江戸の飢饉に――。

西山 あれは天明です。天明の打ち毀し。

尾形 ああそうですね、その天明の打ち毀しの時に少年
が大八車に乗って出てくる。その傍に天狗みたいな強い奴
がついていてね、ものすごい活躍をすることを京伝ら何人

かが実際の見聞として書きとめているわけですが、犬江親
兵衛が子供の時に大八と名前をつけられるというのは、そ
の事実を隠微に匂わせたものだ、と徳田さんが指摘してい
ます。つまり、実際の社会世相をロマンの中に盛り込んだも
のだということになる。その親兵衛や大八車の若衆の出て
くる系譜をたぐっていくと、国文の方に、先生御存じと思
いますが、松田修さんという人がいて、『闇のユートピア』
という本の中で、古代から江戸にかけて、特に江戸の男色
の世界、とりわけ弁天小僧みたいな歌舞伎の世界に至る男
色の系譜を追求しているのに結びついてきます。そこでの
共通項としてあげられるのが、聖性と前髪――。

西山 前髪。僕は江戸時代の男色というのは、それはも
う本当の両性具有なんですよね。つまり、女装をしている
んですよ、全部。そうしていて男性であってね、ですか
ら、お坊さんとか、それからお侍とかに愛される。それが
もう、中村座でも市村座でも最高の女形がこの社会からで
てきました。その男色がずっと低下してくるとね、名女形
が出現しなくなるんですね。そういうのが大体、一七五〇
年頃、十八世紀中頃で、男色の少年は関西がね、近畿が一
番産地です。優秀な男色が江戸へ買い集められてきて

いたのが、近畿から来なくなる。それで名女形がいなくなるんだ、という説もあるんですけどね。で、平賀源内の男色の本が幾つもありましてね、それには、葎町が男色の店なんですよ。葎町の少年がね、つまり男色の少年が名前が決まっておりますね、これが市村座へ出ている少年、とか、これは中村座へ出ている少年とか、全部マークしてあります。男色少年は江戸歌舞伎でも活躍するんです。馬琴なんかは、かなりそういう物語を書く時の資料になっているんじゃないでしょうか。非常に人気のある、それこそ本当の眉目秀麗なる女装をした男性で、少年なんですね。

グレート・マザー

石川 あの、上原先生ね。

上原 はい。

石川 聖徳太子のお話の中で、母親というのは。

上原 うん、母親はね、これは非常に困るんだけれども、穴穂部間人というお母さんね、実は、自分の義理の子と結ばれるんですよ。そういう事情もある。

石川 母親が大きな存在として出てくるといってね、母子関係ということで、何となく、こう、もう一つの型が

ね、あるような気がするんですけどね。グレート・マザーというね。

我妻 それはやっぱり聖徳太子の物語で穴穂部間人が出てくるのは、生まれた時、それからなくなる時だけですね。

野口 話は少しかわりませんが、僕の友達で、東京外語大の原忠彦君というのがあるんですけど、彼が昔新聞に書いた記事んだけど、日本の話に出てくる、所謂英雄というのね、皆欠損家庭だと。それは母親、お父さんがいないって、具体的に幾つもあげているんだけど。その前に私が「巨人の星」は何故うけるか、というのを書いて、あれも欠損家庭。「巨人の星」も、星飛雄馬というのが。

石川 あれは母親がいないんじゃないか。

野口 母親がなくてね、お父さんはものすごいひどいお父さんでね、ものすごい純日本的な優しいお姉さんがそばにいて。そういうタイプというのが。

石川 欠損家庭というのは一つの型としてあり得るね。

で、母親との関係でいうとね、この前申し上げたかどうか、日本の場合には、セックスとの関連でいうと、母子相姦が圧倒的に多いんですよ。父親が娘、というのは無いんです。アメリカは逆なんです。父親と娘は悲惨だな、酔

つ払って犯すとかね。これは日米の比較をしてみると非常に目立つ点なんですよ。

野口 あ、石川さんね、奈良林さんのところに相談に行った、昨年、実際に相談に行った人の数ですね。だから実際には少ないんだらうと思うけど、そこで高校生とかか、最初の性体験、誰ともったかというのが出てくるんですね。圧倒的に母親でしょ。関係あるのか知りませんが、びっくりしちゃいましたよ。母親の次に多いのが、家庭教師の女の大学生の先生。それはもうちゃんと相談に行ったものの記録ですから。

石川 もうちょっと大きな数字ではね、「心と身体の相談室」という電話のカウンセリングがあるんですよ。そこで年間一万五千件位記録取っているんですけども、やはり近親相姦というのが千近くありますね。ただ電話だからね、話作っちゃってんじゃないかという疑いもあるんですけど。だけどやはりカウンセラーが長年のカンでね、これは作り事じゃないという判断をしているというんだけども。その場合はね、一番多いのが、兄と妹なんですよ。次が母親と息子ですね。父親と娘というのは、もうほんとにわずかなんですよ。

斎藤 ギリシャ神話なんかでも、父親と娘というのはほとんどないですね。

石川 はあ、そうですかねえ。

斎藤 母と息子というのが割に多いでしょうし、兄妹どうしのは非常に多いですね。

石川 ただまあアメリカの場合にはね、基本的に暴力社会だから。親父が犯しておかしくないんじゃないかという解釈があるんですけどね。

斎藤 ギリシャ神話で、神様の間では近親相姦は普通なんですけどもね。人間と神の違いというのは、一つは近親相姦が許されている、許されていない、ということなんです。ね、ギリシャ神話の場合。その一つの理由は、はじめ何かこう生物がでてきますね、それがどうやって増えるかということになったら、それをラシヨナルに考えようとしたら、身近なものがそういう関係を結ばない限り増える筈はありませぬね。だから神話の世界ではラシヨナルな説明の仕方として近親相姦がどうしても要求されるわけですね。だから文明社会になれば、人間らしい社会では、それは禁止という、神様の場合はずっと昔ということになる。だから今の場合の近親相姦が、こう問題になるのちょっと説明

が違ってくるね。

石川 だから母子一体感が非常に強いというのはやはり日本の親子関係の、一番大きな特徴じゃないかというのが、まあ大体定説ですよ。精神分析なんかやってる連中は、皆そう言いますね。他の国とは較べものにならない。

西山 セックスと、それからスーパー、超能力の少年という関係が、一つの非常に面白い共通項で考えられるというところはいいお話になってきたと思います。

我妻 さっきの男色の話ですけども、これは西山先生にお話ししていただくと、やっぱり弁慶と義経の話ですけどね。例えば「勸進帳」という芝居があるんですけども、あの世界というのは、確かにその戸樫と弁慶との、例えば山伏問答だとか或いは勸進帳を読み上げるとか、それから義経をはさんでこう戸樫と弁慶との間の非常な緊迫するような、対立がありますね。ああいうところはまあ、見せ場なんでしょうけれども、それよりも何よりも、義経役者としての大変きれいな役者を選んできますよね。例えば昔だったら、仮に菊五郎が義経になって、弁慶を幸四郎がやるとかいう形ですよ。そして、あの勸進帳を読んで、関をのがれてきてから後で、例えば「判官御手をとりたまい」

というんですけれども、こう来ると、向うに上原先生辺りの所に弁慶がいるとしますと、こういう風にやるわけですよ。そうすると、こう向うがやるでしょ、「判官御手をとりたまい」という時は、とっているわけなんだけども、そういう型があるわけですよ。きれいなのがこう、震えるわけですよ。見ると、あれは背筋が寒くなるような、というか、男色に通ずるものでしょうね。

西山 それは勿論そうだと思います。

我妻 義経とね、強いその弁慶との姿。

石川 性的な結びつきを感じますね。

西山 それはそういうものがね。

大庭 あれは能では確か子方がやるんですよ。

西山 能は非常にちっちゃい、こんな(手つき)ちっちゃいのがやるんです。義経をね。

大庭 可愛い。

斎藤 牛若丸みたいな義経ですよ。

大庭 「勸進帳」でも優しい、きれいな衣装をね。

西山 非常に少年としてのような感じに仕立てますね。

大庭 あれは、どう見ても大人じゃないですね。

西山 しかも、額に貴族の黒いあれをちょっとこう化粧

してね。だから、あれはもう完全な貴族の形です。だから形としては強力みたいなかっこうは、全然してないですけどもねえ。本当に可愛い少年で。「判官御手をとりたまい」で、こういう風に出します。そうすると向うで弁慶が目ざとく見て、驚いて後ろへ飛び下がる段取りになります。

野口 私のは余談ですけど、小学校の時の学芸会のメインはね、楠正成なんですよ。所謂「桜井の別れ」で。正行になるのは、何時もね、五年生か四年生の一番の美女が選ばれてね、男はやらないんですよ、正行の役を。

天草四郎

石川 ですから、さっきの母子関係で言うかね、天草四郎のお墓を母親がたてたというんでしょ。あれは何となく納得できる感じがします。

西山 正保のね。天草四郎を、今度僕は下島をね、全部回ってきたわけですよ。そうするとね、下島へ行つてびっくりしたのはね、本当のスーパーマンぶりの伝説が今も、焼物を焼いている家のおばさんとか、自動車の運転手とか、そういう人たちが皆共通に、海を、徒歩で渡ったとか、

それから、鳥を、口笛を吹くと、鳥が寄ってきて手の平にね、鳥を愛したとか。そういうことのできた、大変きれいな少年だったと。やっぱり非常にきれいである(笑)、ということでした。海を徒歩で渡ったというのはちょっとびっくりしました。水平水すのたも焼やというのが本渡にありましてそこへ行つてそんな話をききました。それからそこへつれて行つてくれた運転手にもききました。島原の方ではそんな話はききませんでしたけれど。島原よりやはり天草は、大江島というところから起こってくるんです、天草四郎は。それで大江島から上島へ渡つてそこで幕府の代官たちを倒して、それから下島へ渡つて本渡で大活躍します。しかし富岡城包囲攻撃というのは、これは落ちませんでしたのでそれで海を渡つて原城の、向うへ行つて、向うを占領してたてこもるといふ非常なスーパーマンぶりが、語り伝えられていんです、今も。それで下島にも少年像がいくつもできています。はるか向うを指しているような少年天草四郎が。

森岡 もう少しやせておりましたか。

西山 あれはね、もっとやせているんですよ、その写真ね、とってきて(笑)。あの原城の白いあれはね、あれは良

くなかったですよ。こういう少年なんです、この少年の方がいいでしょう、この少年の方が。この方がいい少年でした。それからね、国際ホテルなんか入ったところにも、銅像があったりしましてね、それからもう少し行くと、また、三種類型違った。でもね、それは新しくできています、昔でできたものじゃあないです。

石川 この間角川映画で「魔界転生」というのがあって、山田風太郎さんの原作でね。天草四郎をやったのが、ジュリーです。

野口 沢田研二。

石川 大変な美少年だか、美少女だかわかんないけど。

西山 これがね(写真示す)、天草四郎がここから渡ったという所の記念碑なんです。(笑)こんな大きな記念碑なんです。そこで、その海岸で僕が立って(笑)。

我妻 海を渡ってきたような感じで(笑)。

西山 随分キリシタンの遺跡があります、下島には。

尾形 そういう少年像を作り出していくというのは、現実レベルの問題なんじゃないかね。今お話のあったように、社会現象として実際そういうのがあったのか、それとも民衆の想像力の問題で、時代が下るに従ってそういうものが

造型されてゆくのか。

西山 先程中西さんが言われたけれども、何かの危機の状態でいたい時には普通の大人でない、普通の人間が持つていない者というのは、まだその未発の両性具有人間というような、非常に美しい、そういう人間を、象徴にでもしないとね、リーダーということに、なって、全体の混乱社会を統一した結果ができないのではないだろうか。つまり、そういうのを、僕はポラリゼーションというような形でね、古代社会以来ずっと共通した一つの型があるんじゃないだろうかというように思うんです。後でできるんじゃないなくて、やっぱり社会の現実の革命とか、或いは宗教集団を守らなきゃならんといったような危機の時にね。どういう人を中心にするにしろ、とにかくまとまらない事はできないという危機が到来した場合、そういう時に、一番あの人が偉いんだなんていうことを決めるわけにいかないからね、それで何もそういうののない、しかし、非常に能力があると思われているような貴種であるということも一つですすわな。それから眉目秀麗であるということも一つでしょう。そういうような共通の現象をもっているようなものが、さーっと何となくあれを立てるといふような、そ

ういう一つの石川さんの言われるような、ポラリゼーション心理現象みたいなものが日本にもギリシヤにもどこにもあるんじゃないんでしょうか、アイルランドにも。

上野 ありますね。

西山 どうでしょう。これはだから後でできるんじゃないかと思ってね、その時にやっぱりできてきたものじゃないかと思えます。非常に美しく、本当に海を渡ったかどうか、そんな話は後でできるんでしょうけども、期せずして何かできたというのは、やっぱり、そういう共通項ありやしませんか。

齋藤 雰囲気というのは、その時なれば、後でできませんやね。話は後で整理されるということだけでしょね。

伊藤 いいですか。

西山 ええ、どうぞ。

神話意識

伊藤 さっきの話ができ上がっている基層というのは、やはり神話意識があると思うんですね。日本人の中には、海の向うから渡ってくる神。そうすると、さっき言った徒

歩で渡ってくるというのは、神性の少年になりますね。そうしますと、結局、船で渡ろうとどうしようと、その人が何らかの点で特別だという承認が得られた時には、そして神性を持った時にはもう、すでに後にできるとかいうのではなくて、同時にそういうものとして見えちゃうんじゃないでしょうかね、その渡ってきた過程が。さっきから言っていた現実と、それから観念というのはそういうような場合には、ほぼ同時成立みたいな形で。それは今の私達のこちたき議論から見れば、どっちが観念でどっちが現実だというかも知れないけど、事実はいつもそういうようなものとして、あるんじゃないかと思えますね。基層としてはそのような神話意識の中で、みさせられてしまつて。ですから天草四郎はそういうようなことによつてまた増幅されますね、特別な人ではないかと。日常ではないものというものは、先ほどおっしゃつたように、貴種であるとか、非常に美しいとかというのは非日常的な価値だと思えますね。ですからそういうシンボルになるのもう、現実性とか日常と切れている人の方が可能性をもつわけですね。その時に、うんと美しいということは、もうすでに可能性、きっかけをその人は備えているんですね。素質を持っているわ

けです。それはどこかでそういう意味文脈を与えられるような、一挙にこう、誕生してくるんですけども、そういう文脈を与えられなければ、ただの美青年で終ってしまいかもわかんないけれども。そういう情況があればそういう風になってゆくでしょうね。そういう情況がですね、さっき言った政治的危機とかというようなことをおっしゃった、そういうような情況の時にさっき中西先生が、情況を引き受けて悲劇的な運命で終わる人は、次の時代の混乱を自分が一身に体現して、自分が死ぬことにおいて、次の政権というものを樹てるわけですね。そういうような時には、つまり一つの権力が終わる時には、後からふり返って考えると、いろんな可能性が、いつの時代にもあると思うんです。次は何かという可能性は。その時の、いろんなこう混在しているものを、一挙に整理してゆくには、結局は、スケープゴートじゃないですけども、新しい秩序を生み出すための犠牲が求められるわけですね。それはだから、誰にどういう役割が当てられるか、誰が演出するのかはちょっとわからないんですけどもね、何かのきっかけで急速にそういう動きが出てくると思うんですね。そういう中で、誰かが血祭りにあげられるという、そういう中で意味づけられ

ることにおいてその人が、一挙にそういうまがまがしきものを体現して処刑される。それによって新しい秩序が万全な体制としてできてゆく。というのは、これはもう大法則みたいになってますよね、歴史の。だから、そういう人間の心情の動きがある限り、常にそういう反覆が行なわれるでしょうし、そういう中で、さっき言った未発のものというものは、より一層そういう意味は担い得るということでは、当然ではないでしょうか。色に染まっちゃったものというのは、もう今更後から意味づけても、どうしようもないんですから。まだ、これは色に染まっちゃったものでないと、着色するのには困りますからね。それは、だからあえて言えば、後世の史家が色をつけるのに便利なんですよね、未発のものというのは。どんな色でもつきますから。で、結局それは後から型に入れて、型どおりの色をつけられちゃうわけですよ。で、それがまた事実になっちゃうわけですよ。で、ただそれは、向う側から見れば、事実でも何でもないと。ただそれは、向う側から見れば、事実でも何でもないと。その人の側から見ればわけがわからない情況の中で、自分はその中で、運命の中に巻き込まれてまったりこめられて、で、その中で一つの事実ができ上がっちゃうという形

なんじゃないでしようかねえ。

石川 ああ、それは面白いな。

伊藤 私はそういう風に考えているんですよ。

石川 性的ニユアンスが、あまりはつきりしないことも、それと関係すると思うんですよ。他の娯楽でいうとね、「スーパーマン」というのがあって、あれも恋人らしきものがあるんだけど、ラブシーンは絶対出ないんですよ。それから、ネガティブなヒーローの場合には、性について、やっぱりネガティブな話がいっぱいでくるんですよ。例えばヒトラーなんていうのは、異常性欲だったという話もありますね。それから、ナポレオンはまあ、ネガティブとは言い切れないけれども、何か、よかったですかね。そういう関係のこともありますよ。だから、こういうタイプのヒーローの場合には、やっぱり性的な何かニユアンスが非常にはつきりしていない、ということなんです。

斎藤 誰かに独占されちゃると。

石川 だめなんだ(笑)。

斎藤 嫉妬心が強いわけだ(笑)。

『海鳴りの底から』

上野 堀田善衛の『海鳴りの底から』という小説がありますね。天草の乱を扱ったもの。あれは、かなりよく調べた小説ですけども、あれの中だと天草四郎が、そういうようにこころ次第にまつり上げられてゆく過程が、克明に描かれています。先程の、多分取材して知ったことなんですけれども、水の上を歩いてゆく話とか、それから鳥が寄ってきて口から餌をつまんだ話とか、そういうのがずっと出てきますね。これは、天草四郎をそういう風に作って、あれは天使の生まれかわりなのかと思わせるように知恵者というのか、リーダーが、そういう風に次第に話を作ってしむけていくんですね。三万五千からはいっている人達、多くはキシタンですから、その人達が次第にそれを信じてゆく。まあ、さめた奴は、そういう風に作ってゆくことを、非常に苦々しく思っているんですよ。そういうような雰囲気にかそれらも引きずられてしまう。そういうような霧囲気をして四郎はもっていて、他の人達はまあ垢まみれで暮らしているわけですけども、天草四郎だけはいつもきれいな着物をきていて、そして毎日一回お城の中を静かに何人かの、美

少年美少女を従えて巡回するんです。で、後はもう、一日小姓と碁を打ってる。何もしない(笑)。

田中 それは全く、書いてありましたね、あれに。

上野 で、そういう風にこう、本人も意識してるのかも知れませんが、それは作られてくるんですね。非常に対照的に。皆が汚れている生活の中で、一人だけ非常にきれいに、いつでもきれっているんですね。それを皆本心に崇拜するような気持ちになってくる。

斎藤 それ、あれですか。歴史記述として信用していいんですか、それとも、そういう歴史小説として……。

上野 中にこういろいろ……。

西山 僕はおそらく小説だと思えます。現地で、色々聞きますと大江島というところで、キリンタン弾圧が非常に強烈になってくるわけでしょう。そうすると村から島全体が大変な危機感に迫られる。それで幕府に対する反抗として、一番最初に大江島から反旗をあげるんですよ。そこで、その一番先頭に、天草四郎が選ばれます。大江島では、非常に島が小さいので、大きな力を結集するわけにいかないから、すぐ上島という所に渡りまして、それで上島から、今度は、船に乗って、一番大きな島である下島へ渡る

んです。下島で非常に大きな勢力になって、向うの代官なんかをたちまちやっつけます。それは本渡の町の中ですよ、今の。本渡の町の中でね、激戦の地があるんです、川のところ。代官たちを皆やっつけ、それから天草の城なんかの方もですね、沢山死ぬんです。その千人塚というのが、今もあるんですが、そういう千人塚の激戦の頃には、天草四郎は象徴としての英雄になっているようです。その頃にはもう水の上を自由に行ったりとか。その激戦地は、ごく狭いところで、あの時代のことですから。川の、石の橋がかかっています。随分大きな力で、やっつけちゃうわけです。それから今度富岡という所が、島の一番、こう島がありますと、島原はこっちの方ですね。島原の方から見ますと、一番右の端の、北西の一番突端がね、富岡という所。そこがね、やっばり、城があって、それを攻めてね、島全体の幕府軍をやっつけてしまおうと思ってるんです。そこはどうしても落ちないんです。それは非常に高い所にありましてね。周囲にずーっと堀があったりなんかしてね、それは落ちないんです。

歴史的に考えるとね、もう非常に危機にさらされているわけで、何時首切られるかわからない、といったような状況

が起ってきた時に、蜂起するわけですから。信者がいっぱいいた下島は期せずして、四郎のもとに信者達が結集して、たちまち四万、五万、六万というほど集まり、さらに海を渡って原城にたてこもり、そして後では皆死刑にされて、首を原城の周囲に晒し首にされちゃうんですよ。だから、僕は、やっぱり天草四郎というのは、現地に行つてみるとね、期せずして、この少年をおし立てたように見えませぬえ。

実際はしかし、堀田さんがお書きになったようなのが、本当かもしれないが、それはしかし僕は想像の世界だと思えますがね。

尾形 後にだんだん膨れあがってきた事件後にね、膨れあがってきた話を同時のようにその中に押し込んで小説にしたということも考えられますね。

上野 考えられますね。

英雄

上原 少なくとも先生、あれですよ、古代ではね、さきの貴種であり美貌であるだけじゃだめなんで、やっぱり強くなきゃだめですね。

西山 ええ、それはまあそうなんです。石母田正さんのね、「英雄時代」というのがあってね、それでは英雄は藤先生のギリシヤ神話のお話のように絶対強いんです、非常に強いんです。これは強いという点で、スーパーマンです。で、そういう強いという意味で、どんな相手と戦っても勝つという、そういうことは、英雄になる一つの条件です。それと英雄の時代はね、法律というものがなくて、

その英雄というのは、総ての部下の人の心情とか、生活条件とかというものを、知悉して、そしてその人々の生命、財産、それから欲望といったようなものを保証する能力があるのです。しかも法律がないから、その英雄の、行動そのものが法律であるという、つまり *Macht ist Recht* なんだな(笑)。そういうのが英雄時代の英雄の特色だと石母田氏はいつているのですよ。つまり、天草四郎が海を渡る、と言つたらもう海を渡ることが絶対であるということになるわけです。そういう条件ができてしまったと思うんですよ。まさに、ポラリゼーションなんです。だから絶対強くなきゃいけないんですね。

上野 それで、強い、で想い出すんですが、この前も、終つてからもちょっと尾形先生なんかにかがったんです

けれども、阿修羅っていうのは、非常にまあ、本当にこう強い、まあ、むくつけき男みたいな感じなんですけれど、実際、あの興福寺の像は、まるでこう、むしろ線の細い女性みたい、少女みたいな感じの。

ああいう風に阿修羅が作られたのは日本なんででしょうか。もともとそういうのもあるんでしょいかね。

西山 あの阿修羅はやっぱり、両性具有の、あの姿で、あれは男でも女でもない、そういう一つのね、象徴ですわな、見事な。

上野 あれで、まあ一番強いんです。一番強いのがああいう風に作られるというのは、どういう作者の……。

西山 やっぱりそれが、最も、感動するんじゃないんですか。今の共通問題のような秘密が阿修羅の像にはあるんじゃないんでしょいかね。

斎藤 美しくなくちゃ、いけないんじゃないでしょうかね。ただ汚くて強いついていうのは(笑)。やはり皆英雄、美しいですよ、ギリシャの英雄は、皆美男子で。

尾形 天草四郎の頃にね、信仰されてきていたキリスト様の像は、どんなだったんでしょ、美男だったんでしょか。

森岡 マリヤが中心じゃないでしょうか、やっぱり母性信仰(笑)。

斎藤 キリスト教といっても、地中海一帯の、つまり、カトリックはどちらかというと聖母マリヤの方が中心なんですわ、崇拜が。

西山 そうなんです、マリヤ様です。

斎藤 プロテスタントになってようやく、イエス・キリストが中心になるんですわ。

西山 だからね、マリヤ様だってある特定の男性の子を孕んだんだというんではね。

斎藤 いけないですね(笑)。

西山 僕はやっぱり、あれは受胎告知があつて孕むわけだから、いわば貴種になるわけですよ。誰かと、どこかでというんじゃないから(笑)。

斎藤 無原罪です。無原罪の御宿り、という。

尾形 ミロクというのは少年の姿ですわ。

西山 ミロクさんは少年ではないでしょう。

斎藤 例えば『弥勒菩薩像集』なんかにありますように、少年というわけではないですよ。ええ、いろんな風に必要上表現するのは……。

上原 必ず貴種ですね、ええ、ガンダラの時から。

西山 沖繩のミロク様というのはね、大きな布袋様みたいです。大きなうちわを持って、しかもあれはお爺さんですよね。

野口 はい。

西山 沖繩では、沖繩のミロク様は。

田中 万福寺の本尊が布袋さんなんです。

西山 上原先生、朝鮮にもミロクがいっぱいあるでしょう。

上原 はい。

西山 ミロク信仰はすごいんですけども、あれは宮田登君の専門です。

我妻 あれは、ですからどの段階で捉えるか、でしよう。シャカと同じですね。シャカだって、誕生とか、修業している時のシャカだとか、捉え方いろいろあるでしょう。ミロクだって、シャカとまあ。

田中 少年像に僕は反対じゃないんです、古代で一番動乱だった、例の継体天皇は年とってから来ましたよね。ただあれは、父親が早く死んで母親に育てられるというの、さつき石川さんのおっしゃったあれと、近いんだけど

も、ただあれが大和に出てくるのは、もう五十になってからですが、少年なんかじゃないんですね。だからね(笑)。

我妻 大和に、何しろ二十年間も入ることができなかったしね。で、天皇になっても数年で亡くなっちゃうでしょう。

石川 その人ね、絵みたいなの、肖像は。

田中 ないです。

西山 そういうものはね、全然ないんです。

我妻 ただ、継体天皇の植えた桜というのはあるんです。千年とか、千何百年の桜がね、伝説です。

上野 ああ、薄墨うすすみの桜ですか。

我妻 薄墨もそうですしね、岐阜のね。それから越前の方にもあるんです。老桜……。

天草四郎の造形

尾形 天草四郎が、想像力の中で造型されてゆくのに、

ミロク信仰とね、それからそのマリヤさんに抱かれた赤ちゃんととしての……。そして、同じ時代にそういうものを生み出したかも知れないな、と思いますけれどもね。

斎藤 いろいろあるだろうと思いますね、恐らく造型さ

れる場合にも。

西山 だから天草四郎の銅像なんていうものは本当に新しいものですね。日本の場合は仏像などの他には、人間の肖像の銅像は、非常に少ないですね。

我妻 『天草兵乱記』とか『吉利支丹退治物語』とかは、少なくとも江戸時代の初めにできたもので、それで禁書扱いにされたものには、本当に一行位しか書いてありませんよね。

尾形 実録物でだんだんふくらんでくるわけでしょ。

我妻 そうなんです。

尾形 それがどういう風になってくるかと思って少し調べたんですが、今言われた『吉利支丹退治物語』や、それから『鬼理至端破却論伝』、それに活字本になっている実録物の『天草騒動』なんかには、名前も違うし、またほんの少ししかでてきませんね。

斎藤 今の天草四郎のこう、そういうその姿を文献的にずーっとたどるなんていうことは、どの程度できますかね。

尾形 実説はわかんないでしょうけれども。

斎藤 実説は勿論わかんない、書かれているもの、です

ね。

尾形 明治まではたどれると思います。

西山 それは、吉川弘文館から出ている、人物叢書のね、



富岡切支丹供養碑の鵠拓本

『天草時貞』というのがあるので、あれはきつとね、かなり詳しくやっているとだと思いますよ。この図書館に全部揃ってます、人物叢書は。天草四郎というのは賊軍ということになってるから。すぐ直後には墓は作れないでしょう。あの墓ができたのは正保四年ですよ、お母さんが墓をたてたのです。ですから十年位経っているんじゃないですか、正保四年というのは。

尾形 寛永は二十一年、正保は何年だったかな。寛永は二十一年ですから。

西山 正保四年位なんです。五年は慶安元年です。

尾形 寛永二十一年が正保だから、それで五年でしょ。であと六年たせばいいわけですから、十年か十一年ですね。

西山 その位、十年ばかり経ってから、あの墓ができているんですね。それから天草の下島にもね、これ(写真を示す)がそうなんですがね、変った碑ができていますよ。富岡というところに。それもやっばりね、正保四年です。写真を持ってきて、拓本を持ってくるの忘れちゃった。これがそのね、記念碑なんですよ。つまり、蜂起した人達の千人塚なんです。それを建てた年がやっばり正保四年です。

我妻 これ正保なんですか。

西山 これが正保なんです。

我妻 正保の頃にこれが建てられるんですかね。

西山 こういう碑が建っているんですよ、それでこの碑文を書いて建てたのが禅寺のお坊さんです。まあすごいものが建っているんです、僕は思うんですが非常に弾圧され

ているんですけれども、何の字だかわからないような字、上に「八」という字がかいてあって、左その下に「白」という字がかいてあって、右に「鳥」という字が書いてあるんですよ。

齋藤 鶺鴒うすうみたいな字、鶺鴒とはちょっと違う(笑)。

西山 これはね、字引きにも何にもないんです。これはね、白でね、押えつけてね、鳥というのは不吉な鳥とか何とかいう、白で押えつけて何とかというようなことを、東大の先生に頼んだら読んでくれたんだけど、何のこともだか解りません(笑)。何の字かわからないですけれども、非常に不思議な、そういう記念碑が、建っているんですよ。だからやっばり十年位して少し噂が遠のいた頃にそういう供養塔を作ったりしています。天草四郎の伝説なんていうものが、あちこちでちゃんと語り伝えられるっていうようなことになったんじゃないでしょうかね。

上野 天草四郎の両親も、キリシタンですよ。それで、お坊さんに碑を建ててもらおう、というのはどういう……(笑)。

西山 そうじゃなくてね。

上野 そうじゃなくて。

西山 これはお坊さん達がね、お坊さんに字を書いても
らったというんでしょう。お坊さんが署名してあるんで
よ、この碑の。それはね、実に綺麗な字が書いてあるんで
すよ。しかしね、ああいう乱があった後で、十年位の後で
ね、あんなすごい碑を。

尾形 その碑そのものが疑わしいのと違いますか。

西山 いや(笑)。それはね、多分僕は疑わしくないと思
いますよ。古さから見ても。

我妻 大丈夫なんですかね。

尾形 『国語と国文学』に掲載された論文で、大磯義雄
という人の「島原の乱に取材した仮名草子」というのがあ
るんですね。当時出版された仮名草子と、そのころ写本で
作ってたものと、四分類似にして内容紹介したものがあ
るんですけども、天草四郎なんて出てきませんしね。出版
を許されたものは、ごく限られてますからね、数は。その
時代にそういう、キリンタンの、主謀者と目された人を
……(笑)。

西山 主謀者の碑じゃないんですよ。千人塚ですから。

尾形 はあ、はあ。

西山 乱でなくなった人の供養塔なんです。だから、そ

れは……。

我妻 どういう連中が作ったんですか、それは。

西山 その連中のことも書いてあったけれども。

我妻 千人塚を作った人達というのは。

西山 今日持ってくるの忘れちゃった。そのために買っ
てきたんです、そうですね。一八〇センチメートル位の高
さですよ、記念碑というのは。

尾形 昔だったら時衆がそういうことやってまわったで
すけれどねえ。室町時代だったら。

我妻 時宗の坊さんがね。それ、白、鳥というのはちよ
つと何かいわくありそうな感じで。

齋藤 白になにか、デウスが入んないかと思つて。

我妻 そうですね、古い何か『排耶書』だとか、ああい
う古いものを見ると、たしか、ダイウス(大白)といつて
ますね、神を。デウスのことをね、ダイウスということに
してたんですね。

西山 デウスかも知れないな、これ。

齋藤 デウスの白しろですかね。

西山 それでこれはウだな。これはデウスだ。

尾形 「八」は何です。

西山 うーん。

齋藤 「八」ねえ(笑)。

我妻 上、欠けていれば「大」になるんですね(笑)。

石川 デーウス、なる程。

我妻 ありますよ、向うの、ダイウスというのはね。

尾形 ああそうか、さっきの大八車の大八の頭が欠ければ、そうなんですな。

西山 「台」じゃないから。

尾形 大きい、大小の「大」の頭が欠ければ……。

西山 頭が欠けているわけですよ、これねえ。これ、デウスだな、デウスにちがいない。

齋藤 「白」一つでウスと読めるから、「鳥」はどうなるかな。鳥は天を指す、天使(笑)。

田中 デウスではないかと、さっきから考えていたんだけどねえ。

我妻 三本足のカラスっていうのはねえ(笑)。これも、デウス(泥鳥須)でしょう。

田中 考えてはいたんだけど、この「鳥」もわかんないし、上のこれもわかんないし。

我妻 ザビニルのはじめの頃は、大日だいちということだった

わけだけれども、大日だいちとっていただけですねえ。ところが、

どうも大日だいちというんじゃないんだというのに気がついて、それから、徹底的にデウスにさせちゃって……。

伊藤 いずれにしても、簡単に解読されちゃ困るんでしょ(笑)。

西山 解釈は、デウスの読みが一番いいんじゃないでしょうかね。

齋藤 それに近い線でしょうね。

西山 近いでしょうね、ええ。デウスだろうねえ。

再び貴種について

尾形 貴種を尊重するという考え方が生れるのは、何時頃からですか。

西山 それはもう、非常に古いじゃないですか。もう、『古事記』『日本書紀』あの頃もう全部あるんじゃないんですか。

我妻 貴種流離譚というのは……。

尾形 貴種流離譚とおっしゃるけどね。

西山 ええ。

尾形 それは実際にあったのか、現在の沖縄の信仰や中

世の語りからの類推でそうおっしゃるのか。

西山 あの、つまりまだ原始社会の時には、貴種だとか何だとか、そんな分離があるわけはないからね。つまり、権力社会ができた時に権力者が貴種になるわけですから。日本でいうと、まあ、二、三世紀古墳ができる頃に、貴種というような思想ができるんじゃないですかねえ。その頃が英雄時代。その英雄時代っていうのは、さっき申したMacht ist Recht の時代で、力が強くて、眉目秀麗で……。

我妻 三世紀あたりで、先生、でますかね。

西山 だから日本では、三、四、五、そのあたりがまだ、大和朝廷なんてのは、無い頃ですからね。

我妻 五、六世紀あたりだったらあるでしょう。

西山 五、六世紀ぐらいかね。でも、三世紀ごろにはもう、すごい大きな古墳、できているでしょう。

田中 三世紀じゃあ。ちょっと後じゃないかなあ、英雄時代では。

伊藤 類推というか、まるで思い付きでしかないんですけども、直接的な支配を越える領域に、支配権が確立できるといふのは、観念的な権威が通用しなければ、どうにもならないですよ。支配者は、人間に優越する自然秩序を

体現する形で、尊貴でなければいけないとすれば、当然、自然秩序における根源的なものといふのは、どんな社会にだって考えられていたわけですが、例えば、太陽は一つであるといふのは、紛れもない事実ですし、北極星は動かない、といふのは夜空を見ている人には、紛れもない事実として認識でき、世界は一つの中心を持たねばならないという観念が受け容れられ、かかわりを持つ範囲を一つの中心をめぐる秩序の中に序列化することが、存在するものの公理であるという思想にまで抽象化されたと思います。世界といふのは、そういう風に一つの中心を軸としてきているなあという観念は、太陽・月といふような存在によっても、明確な証明を与えられていますからね。そういうようなどころから、やはりだんだん人間社会の秩序も、誰かが中心になって統一秩序を保たねばならないということになり、支配者は天の理にのっとって君臨することになります。その時支配者の条件は、直接的には力関係がものをつたのでしようが、力の原理は非常に相対的で不安定なものですから、そうした相対性をふりきった血筋(神の子の系譜)といふ絶対的な基準による優越性を体現する必要がありません。支配者が自然の秩序を体現するという形を儀礼

を通して完成し、それをイデオロギーとしても皆が認め、それをまた鼓吹するという構造が出てこなきゃならなかつたと思うんですよね。

西山 ええ。

伊藤 そういうようなところで当然出てきたんで、最初は自然秩序を体現する形で出てきたっていうのは普通なんじゃないでしょうかね。ですから常に一つの中心っていうのは、こう、自然の秩序をかたどる方法を持ちながら……。

西山 だからね、その通りなんですよ。だから、ヤマトケルというのの方々にいたんですよ。それが、ヤマトケルという一人の人間像に集約されてきたのです。それが『日本書紀』や『古事記』の段階。だけでも、その中に「一書」なんてのがあって、それは全部違う形で書かれているようなことです。そういう観念ができる前は具体的にそういう英雄たちが競争していたというのです。つまりあつちに小集団、こつちに小集団てなのがあるわけですよ。その内で一番強い奴が、とにかく貴種になるわけですよ。

伊藤 そうでしょうね。

西山 全部倒しちゃって。それが、天皇家だったわけ

しょう。だから、天皇家の、神武天皇はハツクニシラスメラミコトというんですが、カムヤマトイハレヒコともいうんでイハレのヒコですよ。イハレにいるヒコつまりカムヤマトイハレヒコが、ハツクニシラスメラミコトというようなのになると、それが全部集約されて、一人が初めてからやったように、観念の上でなったのが記紀神話でしょう。だけど、実際はそうじゃなくて、いっぱいそんなのがいてそれらを皆やつつっちゃって、それで神武天皇という核ができるわけですよ。だから、そういう格好で、天草四郎だって同じじゃないですか、方々から多くの人たちがすごいのがいるそうだし、という噂が噂を呼んで、ポラリゼーションになるんじゃないですか、それは。観念と現実と一絡になっちゃうんじゃないですか。

伊藤 祭政一致ということなんでしょうね。祭祀権っていうのは、相当有力な根拠だったんじゃないでしょうかね、統治権というようなことで。だから祭政一致。

西山 この前、森岡先生が言われたような、今みたような時代における宗教のカリスマ的存在が、情報社会のような場合、昔のような親鸞様とか、日蓮様とかといったような形では、もはや教祖にはなり得ない。それで非常に、何

ていうんですか、おっしゃったような、並列的というんですか、そういうものが、一つの核としての聖者を作るようなね。現代とは、非常に違っていたわけでしょう。

伊藤 そうだと思えます。

西山 だから、古い時代はそういう情報もないから、それじゃ、どこでそういう集約されるのか、というようなことに。それはちょっと我々にわからない世界があるんじゃないですかね、古い時代は。天草四郎だって。谷の三つ位向うとね、十位向うとはね、伝達の方法も違うでしょうしね。だけれども、原理としては全く同じではないかと僕は思うんです。力が非常に優れているとか、秀麗であるとか、さっき言った原理はやっぱり同じじゃないでしょうか、皆さんおっしゃったような。だから、それはやっぱり、伊藤先生のおっしゃるような太陽とか、それから北極星とか、天皇とか、というような存在は、観念と同時に実在しているものでしょうからね。そういう実在というものが、どういう形でできるのか、というのがやっぱり原則でしょうから。

石川 天草四郎復教説というのはいですか(笑)。

西山 復教説はききません、天草四郎は。大江島の他に

どっか別の所から出たという話はないかとききましたけどありませんでした。それは大江島です、と言って、全部が。大江島でした。

森岡 天草四郎はどこかのがれて、実は生存しているとか(笑)、そういうことは。

西山 それはね、何かありそうなんですよ。

我妻 原城脱出(笑)。

西山 原城をね、脱出したというような説をしている人はいるらしいけど、あのあたりでは、ききませんでした。天草四郎は下島へ帰ってきてきて潜んでいた、という話はどこにもありませんでした。

我妻 やっぱりキリシタンは脱出しちゃまずいんじゃない(笑)。

斎藤 そりゃどうしても死ななきゃいけないですね(笑)。キリシタンの英雄には、なれないな。

西山 やっぱりそれは、キリシタンの場合は『日本切支丹宗門史』を見たってね、全部殉教してゆくことが、非常に素晴らしい世界へ、今から行くんだということばかり書いてありますよ。レオン・パジェスの『日本切支丹宗門史』にはね。

さてそれでは、一応これでいろうなお話ができましたけれども、上野先生、何か、アイルランドのお話、少しつけ加えられるようなこと、ありませんか。

記憶と情報と

上野 別に、ないんですが、一つ、日本ですと語部とい
いますか、語り伝えていろいろ神話伝説の類が伝えられ、
しかも広まって参りますですね。それと同じように、アイ
ルランドの場合には、詩人がそういう役割を果たしている
ということがあるんですが、それが、昔すでに学校があり
まして、詩人が学校教育で、育てられるわけです。それ
も、かなりの年限、今ちょっと年数忘れたんですが、七年
位でしたか、かなりの年限やりまして、なかでも特別に十
数年という最高の学歴まで持ったものが、それぞれの族長
の家の栄光の歴史をずっと語り伝えるという役割を果た
す。日本の語部と同じだと、よくアイルランドの人は言う
んです。それが、勿論詩人、専門の詩人でもあるわけなん
ですけれども。アイルランドというのは詩人の国でも昔か
ら有名なんです。(明治二十年代の『国民之友』にはアイルランド
には詩人はおらず、詩もないなどという記事ののっている。)詩

人に二種類ありまして、一つは、キリスト教のお坊さん、
です。それがまあ詩人のような役割を果たして詩も沢山作
る。ただこれはまあ素人の詩人なんですが、それと、こう
いう、詩人としての教育を受けて、プロフェッショナルな
詩人になって、詩を作り、更にそういう、それぞれの族長
の栄光の物語をずっと、語り聞かせるという、そういう役
割を果たすものと、でてまいります、これが、中世ずー
っとそうだったのです。十七世紀に、エリザベス一世の軍
隊に最終的に負けて、族長の、有名な家系ですとオニール
というのがありますが、ユージン・オニールなんかの先祖な
んですが、それが一番の、イギリスに対する抵抗の旗頭な
んですが、それが、エリザベス軍に負けて、仲間の族長も
率いて全部逃げちゃう、ローマまで逃げちゃうんです。そ
うしますと、今まではそういうパトロンのいましたから、
そういうのに財政的な援助を受けて、詩人が社会的な活躍
もしていたわけですが、パトロンの逃げちゃいますと、も
う、詩人を養ってゆける社会層がいなくなっちゃうわけ
ですね。そうすると今度は詩人の方もしょうがなくて、しよ
うがないということもありません。それが、一般の民衆、普通
の生活者に支えてもらうようになります。そうしますと今

度は、詩人の役割というのも、支配者の伝説だけを語り伝えるというのではなくて、民衆の中の生活をうたいだす。それから民衆が本来的に持っている、自立したいという気持ちを、鼓吹する役割りを果たすようになる。アイルランドの独立運動の鼓吹者、ないしは、それをこう、その気持ちをもちもり立てるといふ意味での、違った、社会的役割りを詩人が担うようになるんです。で、今、ちょっととききたかったのは、そういう意味でいうと、日本の場合にも語部もいるし、詩人も沢山、万葉の頃からいるわけですから、そういう人達がどういふ風な育てられ方をして、どういふ社会的な役割りを果たしたのか。それから、そういう詩人がそういう風にして伝えてくるものの中身ですね。まあアイルランドの場合は、そういうような、かなりはつきりとした、途中からの役割りの変更というのがあるけれど、そんな意味でのものが日本に見られるのかどうか。そんなことも何うと、あるいはこういうポラリゼーションにしても何にしても、そういうのを作ってきた、作り手達の動きとどういふふうか、そういうのを作った、作り手達の動きとどういふふうか、そんなこともわかるんじゃないかな、という気がしたんですが。

尾形 折口先生門下の人達は、万葉時代にやっぱり吟遊

詩人がいて、有間皇子の話とか、大津皇子の話というのは、そういう吟遊詩人達のお得意のレパートリーだったんじゃないかと言っているんですけども、証拠はないんじゃないですかね。ただ類推で言っているんじゃないでしょうか。はつきりしているのは、日本の中世でしょうねえ。

上野 やっぱりそういう人達は、一つのこう語りの「型」を持っていて、それに合わせて、作って回るのでしょね。

尾形 どの話も皆似てますね、「型」は。

西山 だけでも、古代だっつとそういうのを語り伝えるということはあるんじゃないかと思いますが。そうでないと、あれだけのことはでてこないと思います。文字がなくても、ちゃんと語り伝えるということ、かなり正確に語り伝えたんじゃないかと思うんですよ。僕なんかでも、手帳を持つまでね、NHKの放送をするようになって手帳を貰うようになるまではね、電話番号六十位全部暗唱してました(笑)。

斎藤 それはすごいですね(笑)。

西山 手帳に書くようになったら、全部だめになりました。だから、文字を使わない場合、というと案外そういう

語部は、正確に覚えていたもんだと思います。

齋藤　ギリシャの詩人の場合も全く同じですよ。先生のおっしゃる通り、やはり一種の語部的なものです。だから、文字は最初お役所みたいな所が、トロヤ戦争のような戦争があったその時代には、支配者だけが文字を使つたんです。記録、つまり、あれからどれだけ税金取り立てるとか、車輛をどれだけ用意するとか、つまらない記録、(笑)我々にはつまらないんですが、歴史家にとっては非常に大事な記録が、線状文字Bという文字で書かれています。ちょうどエジプトの象形文字と、後の $\alpha\beta$ 、 $a\ b\ c$ との中間の文字ですが、ミケナイ文明が減ぶ時、もう字そのものが滅びちゃうみたいなことになり、後世のギリシャでは全然文字についての記録がないんです。古典時代には昔のギリシャには字がなかったと思われてたんですよ。でも、この文字は戦後ようやく解読ができましたね。それで、全く古いホーマーが描いたトロヤ戦争時代の支配者達が使った文字で記録が書かれていることがわかりましたね。でも、ホーマーの詩をうたった連中は字は使っていないわけで、その詩は語り伝えてですね。詩人団みたいなものがありまして、やっぱり先生のおっしゃった吟遊詩人ですが食べるた

めに歌っていたわけです。歴史家ヘロドトスがそう言っているのですが、神様を決めたのは、詩人のホメロスとヘシオドスで、それまでは、あちこちに同じような神様が、その土地土地に祀られていたというんですよ。だから、神様の名前をきちんと定めた詩人が神を作つたというんですよ。(笑)そういう言い方になってるんですね。要するにヤマトタケルノミコトのような英雄が出てくるのはまあ、そういう、つまり、語部といいますが、語部にも中心的な語部もいたかも知れませんが、それが仮にホーマーだとすれば、ホーマーがつまりはつきり英雄を作り、その、神様を作つたことになりました(笑)。

西山　日本だってね、僕らの教わつた肥後和男先生がね、「神々の誕生」という、非常に有名な論文がありましたよ、つまり、崇神天皇と、神武天皇とが同じ名前なんですよ。ハックニシラススメラミコト。それで、神武・綏靖・安寧・懿徳・孝昭・孝安・孝靈・孝元・開化と。この間がね、大体一人の天皇が百二十歳位ずつ生きてるわけですよ、皇紀ではね。そんなことはちょっと考えられません。

それで、事件記事は何にもなくて、御陵と生まれた時と皇后の名前とが書いてあるだけ。つまり「大和闕史時代の

「一考察」というのは、つまり、崇神天皇が神武天皇であった。それでその前に生まれ、その前はその次に生まれと。つまり一番初めに生まれたという神が、実は一番後でその神様はできた神様だといわれたのです。さっきの論理と同じです。観念の世界における神々の誕生というのは、そういうものじゃないでしょうか。実際は、つまり崇神天皇の頃に、そういう意識ができてきて、さて、何時からはじまったんだろうということ、やって。しかし崇神天皇の頃にまだそれを考えたわけではなくて、大体、聖徳太子、推古天皇の頃になって、書くような頃にそういうことがはつきりしてくる、ということですから。だから、具体的にあった事実みたいなものは、伊藤先生のおっしゃったような、貴種とか権力みたいなものは、かつていくつあった。それが、ある段階ですと成立してくるというんじゃないかと思うんですね。その一つがヤマトタケルのような、少年の眉目秀麗な両性具有の英雄なんでしょう。

齋藤 両性具有になっちゃった(笑)。

西山 これだって、やっぱり少女になってゆくわけですからねえ。ヤマトタケルは。

齋藤 ただ、両性具有といえますと、ギリシャには、両

性具有の神様ってあるんですね。

西山 ああ、そうですね。

齋藤 それは別の崇拜のされ方をしているんです。ヘルマニアフロディーテ、ヘルメスト、ビーナスですね、フロディーテが一緒になった、ヘルマニアフロディーテ独特の……。それ、完全にセックスのシンボルを二つつけている。男女というの、好きなんですよ、ギリシャ人は。

石川 あれ、ループルで見たなあ。

齋藤 ローマにもあります。非常に魅力的の、独特のあやしい魅力を発揮しています。

石川 横になってるのですよ。

齋藤 ええ、ええ。

西山 そういふのは、非常に遠い世界だと僕は思ってたけれども、案外(笑)、近い観念の世界に、実際日本でも、あるんですね。日本ではしかし、そういう造形化されたものはないでしょうね。

齋藤 造形化された両性具有の神様ですね。

大庭 もつと非常に象徴的なものでしょうね、神社の御神体みたいなものですとね。うっすらとわかる程度に。

尾形 さっきの語部の話で、牛若丸の場合は、中世社会

のいろんな語部がいましたから、わかるんですけども。その中でだんだん女性化してくるとか、少年化してくるとかいうんですが、天草四郎の場合には、あんなもの語るわけにいかなかったでしょうし、語部がふくらましたり伝播していったりしたんでしょうかねえ。

隠れキリシタン

西山 私はね、天草四郎の場合はですね、やっぱり天草のね、非常に強烈な隠れキリシタンというものがあるでしょう。僕は隠れのね、伝承だと思えます。この隠れキリシタンはすごいんですよ。で、今でもずーっと牛岡うしかがの近くにね、去年仏壇の中から隠れの非常に貴重な資料がでてきました。だからこれは、そういう権力者の場合のような語部でなくてね、つまり天草四郎を本当におし立てたポラリゼーションの地下潜行の実力というものでしょう。これは大変な勢力ですよ。隠れというのはものすごい。非常に多くの人間がいます。河浦という村、園田元外務大臣のでてきた村、この河浦のところね、やっぱり隠れが沢山いて、明治に非常にすばらしい宣教師が来ているんです。そこは、ただちにまたキリスト教になるんですが、寺院と

川一つで同じ村に仏教信者と、カトリック信者とが相対立して川で明確に分かれちゃったというんです。その向う側がね、大江の天主堂という天守堂になって残っています。今も立派な天主堂です。

森岡 それは天草ですか。

西山 天草です。下島です。それでね、これはね、僕はやっぱりああいう大きな弾圧を受けて、そしてしかも英雄像がね、何故残っているのかということは、下島を回ってみてはじめて隠れの実力というのを感じました。隠れがずーっと言い伝えたんでしょう。

尾形 天草じゃ、隠れが力をもっているわけですか。

西山 隠れはね、それはもう表立ってやれませんか、だから表にはいないんですけれども、それでもとにかく墓が十字架くずしで全部石のキリスト教の墓です。そういう墓は全部、自分達で隠れのキリシタンの十字を刻んであるんです。

尾形 五島でもそうなってます、仏教の方では浄土で、隠れと、それから明治になってからのと。キリシタンの中でも二段階、三段階位あるようですけどね。

西山 そうらしいです。

こっちにできたりは。ですから明治になって、多くの人がキリスト教になる、ということがある意味の土壌というのだったんじゃないかと思えます。

齋藤 隠れキリシタンというのはまあ、隠れてるわけですから、隠すわけですから、調査はしにくいでしょうけども、日本では民俗学的な研究とか、そういう立場からの調査みたいなのは、どの程度行なわれているんでしょう。

西山 あのね、非常に大きな『隠れキリシタン』という本があります。

野口 『昭和時代の潜伏キリシタン』っていう、田北耕也の本。僕も教わった古野清人という先生が、『隠れキリシタン』まあ大体大きいのは二つ位ですね。

我妻 そうですね。

齋藤 それは実際自分の足で、或いは耳で材料を集めたのですね。

野口 そうです。

森岡 内藤莞爾という九大の社会学の教授が、五島とそれから天草の方あたりを詳しく調査しています。五島については『五島列島のキリスト教系家族』という本を出しました。

我妻 簡単なものでは助野健太郎氏にもありますね。

森岡 そうですね。隠れるんですけど、全面的にもぐっているんじゃないくて、自分がキリシタンだということを隠しているだけです。

西山 あのね、観音様をね、観音様を信じて。

齋藤 そういふのは見たことございますね。

西山 観音様をマリヤ様に。

齋藤 はあ。

西山 マリヤ観音というのがね。

我妻 ただ、確かあれは寛永かなんかも知れませんが、「宗門檀那請合」というのがあるんですね、幕府が出したもので。それでは檀那寺はあるんだけど、檀那寺に、お釈迦様だとか祖師だとか、或いは命日だとか、来ない者は、これはキリシタンかも知れないから、厳密に吟味すべきこと、とか、あるんですよ。それから、年忌なのに、坊さんには仕方ないから、法事をやりますよ、と言うんだけど、何か仲間だけが遠くに寄り集っていて、坊主が来ても一向にそのサーブिसもしない、これもキリシタンかも知れないから、厳密に吟味すべきことなんて、何か条もあるんですよ。だから、ああいふのは、あれ裏返せば、キリシタン

はそういうことやつてたのか、という、隠れはね。

西山 僕、前にね、あそこを回った人にね、「マリヤの旗印」という御土産貰ったことがあるんですよ。それはね、こういう羅紗のね、布にひもがついていてね、真中に十字架がこうぬい込んでありますからね。それを肌身離さずつけていてね。で、それを夕方とかね、何かに拜んでいた、というんですがね。随分方々でね、「マリヤの旗印」はないかって聞いたけど、どこにもありませんでしたね。(笑) あれはどこにあるんですかね。

野口 知らないです(笑)。

森岡 原城で何万という人が凄惨な殺戮をされて、まあ事が終わったわけですね。その後、何か慰霊鎮魂の事をしなければ、さまざまなたたりが天災、災害ですね、その地方を中心に起こってくるというようなことは、どうも、あまり聞きませんけど、どうなんでしょうか。

西山 どうなんですかね、聞きませんね。

野口 千人塚なんか。想像ですけどね、今、先生おっしゃったような形が、やったんだたとすればね、わりとスムーズにできたんじゃないでしょうか。ほっておけば悪霊になって彷徨するということなんで。

齋藤 だから、キリスト教の場合ですから、本当に信仰に殉じた、と、もしその五万でも六万でも、人間も、そういう立場の人だったとすればですね、それは悪魔になったり、たたりをするものになる筈はない(笑)。

西山 僕はね、その点はね、だから非常にね、キリスト教的だと思っんですね。日本人だったらね、五万、六万っていうんですからねえ。六万人も首切られてね、そうして処刑されたなんていったらね、そこはね、非常にたたる所になりますよ。

権力・信仰・先祖

森岡 それからもう一つ、中世以前の政治権力は相手方を徹底的にやっつけた場合、慰霊鎮魂を必ずしたようですね。ところが、信長以降の権力は政治が宗教を押え込んでしまった。ですから、いくら殺したって恐ろしくないのですね。明治の初めの戊辰戦役の場合など、東軍方の慰霊鎮魂をさせなかった。政府がしなかったばかりか、民間でしようとするのをさせない、埋葬すらさせなかった。

齋藤 それだけラショナルな。

森岡 ラショナル、ええ、そういう権力の性格と思いま

す。

齋藤 そうでしようね。

西山 そうかもわかりませんよ。つまりね、武田信玄と上杉謙信はね、まだ二人ともお坊さんで比叡山なんか大事にしているんですが。信長は比叡山なんか焼いちゃまえて(笑)。秀吉になると、自分が神様になっちゃうわけです。それから家康だって自分が神様になっちゃってます。

というようなわけで、あそこで非常に大きな精神的革命現象が日本にあります。転換軸は信長です。あそこが、非常に大きな断絶点になっている。その断絶点になった新しい人間像が新しい権力社会を作りました。信玄とか謙信などは平安時代以来の精神構造をまだ伝えていたような連中です。この人たちは新しい時代の支配者になれなかったんです。だから、信長、秀吉、家康という、三河のあたりというの是最も農村分解が進んでいまして、鉄砲を持ってうまく戦えましたが、上杉や武田は、騎馬武者中心でして、一人の領主がいると、そこへずーっとついていっているような軍団だったのです。信長や家康のところは、農村分解してるから、皆、小名主でして、一人一人に鉄砲を与えまして、それが基本的武力になるというような新時代を開きま

した。だから人間の実際の力がものをいう、そういう時代を創出したんですよ。だから、信長、秀吉、家康といううな人たちは、全部三河、尾張あのあたりから出てきています。北からも出てないし、南からも出てないし、ちょうどあのあたりです。近畿のあたりだとね、非常に分解が進んじゃいまして弱小勢力の寄り集まりになってしまいました。ですから大軍団ができないんです。尾張の信長や秀吉、三河の家康のあたりは、かなり大きな軍団を作れる、まだそういう、完全分解していない途中である、そういう所だったわけですね。だから、新しい時代は信長が一番先端を切ったと思いますよ。

我妻 それと、やっぱり島原の乱というものの、取り扱いは、私なんかあまり不勉強ですけど、知っている限りでは、大変時代によって扱ひ方が変わっているというところでですね。戦前っていうのはやっぱり、宗教弾圧の戦争という面が非常に強くて、これは江戸時代を通じてあれだけキリシタンというものを弾圧して、寺請制度ががっちりして、本当にキリシタンを目的にしてやっているような位、いろんな法令が出ていたわけですから、キリシタンという意味を非常に大きく見るのが当たり前だったと思うんで

すけど、戦前は割合そういう面が強かった。戦後は、むしろ農民戦争というか、百姓一揆の大きいようなものという感じですね。だから鎖国というものも、禁教というようなものよりも、例えば、白糸割符というふうなもので、貿易というものの、独占的な面を幕府が取るため、という、そういう面が強調されてますからねえ。あの、やはりキリスト教の問題というのは、やっぱり大きく取り扱わなきゃならぬいだらうという感じがしますね。それと、キリスト教では必要でなかったかも知れませんが、普通まあ、農民一揆、百姓一揆の場合ですと、佐倉惣五郎でなくたって、その主謀者というのは、仮にまあ、殺された場合に、妙なほこらを作ったりして、信仰しますね。それとも、信仰しているわけですけど、鎮魂という意味と、感謝という意味もあるんでしょうけど、キリシタンだからそういうものが得られないという、政治的なものもあるかも知れないし、或いは、殉教だから鎮魂する必要がないから、(笑)というそういう面もあるかも知れませんが、それからもう一つは、本当に宗教弾圧で、四郎が殉教をしたんだとすると、二十六聖人のように、聖人にされてもいいんだけど、聖人になつてますか、天草四郎は。

齋藤 多いからしようがないんじゃないですか。六万人も一遍に聖人にすることは(笑)。カトリック当局といえども(笑)。

我妻 大変、こう、ある面は割り切るし、割り切れないみたいだね(笑)。

齋藤 まあ一つの、むつかしい現象ですね。

我妻 そうですね。

齋藤 鳥原の乱というのは。ただしかし、天草四郎みたいなのが出てくるというのは、農民一揆だけでは理解できないです。

我妻 できませんね。

上野 例えばね、原城の跡に行つて奇妙な感じがしたんですが、それは、ローマのバチカンですと、火あぶりにされ、処刑された場所に立つてるわけですね、そこが今度は聖地になりますよね。日本のキリスト者が、あれだけの大変な虐殺までされながら、まあほとんど全員ですからね。そういう大きな事のあった所だから、そこに、碑を建てるなり、そこを一つの日本のキリスト教の聖地にしても良さそうなものなのに、そういう雰囲気は全然ないですね。

齋藤 ないですね。

上野 二十六聖人でしたか、あっちの方はまだいる

教会や何かあったりしてるから、まだわかりますけども。

西山 それはね、聖公会の人でもカトリックの人でも、

隠れの人達に説教に行つて説得したんです。しかしぶつぶつ丹ていわれる人たちは、きかないのです。そんなぶつぶつ丹ではね、キリスト教の本当の信仰と離れちゃつてるから、ちゃんとキリスト教の正しい信仰の教えをもつて、洗礼を受けなさい、と説得したんです。でも、そんなのは、

いやだというんで、全部隠れは隠れの昔のままやつているというんです。つまり、もともとのルーツへ帰つてキリスト教の正統な信仰者になろうという意識が日本人の隠れにはないらしいんです。こういう事情があつて、キリスト教自身が四郎を本当に聖地にしようとしましても、現地とそれがうまく結びつかないんじゃないですか。そういうこと

があるんじゃないかという気がします。だから、トインビーがいうように、文化の化石化というようなこと、化石文化化つていうのが、あるでしょ。地下に隠れた場合余り長くなると、本当のものをだんだん忘れちゃつて、ぶつぶつぶつぶつというようなね、そういう化石、これ、化石になつちやつてると思うんですね。だから、隠れはキリスト教の

ね、非常に変形した化石文化じゃないかと思うんです。だけれども、四郎だけはね、ちゃんと聖者としてね、立っているけれども、信仰としては、非常に化石化している現象じゃないかという風に思うんですね。だから四郎のそういう殉教者のあるところが、聖地にならない、つまりキリスト教化石地であると、いう風に、文化的には考えられるような気がするんですがね。

齋藤 関心がありませんね、日本のカトリックは、その五島列島とかああいう所に。この間、哲学の集りの時に私よりも歳上の松本正夫さんで、これカトリックで、大変氏育ちのいい人で、正統カトリック信者なんですけど、僕が五島へ行つたという話をしましたら、本当に驚いたよ

うな顔してました。

西山 はあ。
齋藤 私などはもう何かあそこへ行くのが恐ろしくて、と。やはり何かキリスト教ではあるけれども、何か異質のものを感ずるらしいですね。

我妻 あれはどういうんでしたっけね、あれは森岡先生。キリスト教の信仰がある程度許されるのは明治六年か何かに。

森岡 六年です。

我妻 そうしますと、宣教師が隠れのところに入りますね。そしてそれに入って行って、そして現地の隠れの連中から受け入れられて、そしてうまくいつている場合と、全然拒否される場合と、両方ありましたですよ。

森岡 方向は全く正反対なんですけども、共通する点はそのに先祖が介在していることですね。もとは「隠れ」ですけど、明治の初めに教会へ復帰する者と、しない者と二道に分かれた。分かれた方向は違いますが、両方共先祖が関係している。というのは、教会へ帰った方はですね、何代か立てば、西からパードレが船に乗ってござるという先祖からの伝承があつて、いつくるか、いつくるかと、待っていたんです。そういう人々なんです。それから教会へ復帰しなかつた方はですね、そういう伝承がわりと薄くて、「隠れ」のあり方は先祖からやってきたことであるから、自分達はそれを捨てることできないと考えた。だから宣教師がいくらアプローチしても、潜伏状態をつづけたのです。

我妻 ぶつぶつになっちゃうわけですね。

森岡 そう、ぶつぶつになっちゃう。それは先祖がやっ

てきたからですね。

西山 大江のね、それはその、来てくれるという、それでそれ、あその所あなるんですな。先祖から、やがて来てくれるというね。そうですね。

上野 先程の、また小説で悪いんですけども、堀田善衛の『海鳴りの底から』の最後のところですね、そこに、今思い出したんですが、まあ、今の、隠れキリシタンの子孫の人ですね、堀田善衛が話を聞いた人、その人に「これからあなたも、今のキリスト教会にもどりますか」と聞かれましたね、そうすると、「いやもどりません」というんで、「あんなものに入る位だったら仏教徒になります。」というのでおしまいなんですよ(笑)。だから、先祖からずっときている一種の祖先信仰に似た形にキリスト教はなってるから、もし、もどるんだとしたら仏教にもどる、仏教の方がむしろ合うのかも知れませんが、そういう人達には。

野口 面白いと思いますけど、沖繩の宮古島にね、キリスト教がどんどんどんこう、入ってくる。どういふ形で入ってくるかという、まずね、クリスチャンの信者のね、位牌を作るんですよ(笑)。位牌作ってね、教会の神父さんはそれにカタカナで洗礼名を書いてくれて。

我妻 戒名だね。

野口 もう一つは、葬制が二次葬、一回葬式やって埋めて掘り出して洗って、そうしてもう一遍祀り直すという、葬制とっているから、それはちゃんと守ってないよね、キリスト教広まらない。そういう祖先崇拜の伝統的な形を。

西山 なるほどねえ。二つあるんですね、たしかにね。

野口 今はやっぱりメシヤですが、先祖が帰ってくるというのは、今先生がおっしゃったパードレは。

森岡 まあ恐らくそれとかすかなつながらがあるんじゃないでしょうかね。

西山 大分いろんな話、脱線したり何かもしまして、司会が非常にまずかったですから、あれですが、しかもまあ今日はいろいろ大変面白い問題が沢山話題になりました、有難うございました。